

日本葬送文化学会

会誌

平成18年12月 第9号

目次

ごあいさつ

浅香 勝輔 3

第三部

第一部

九州諸都市火葬場の歴史的位相の系譜

浅香 勝輔
井上 康時 4

第五回 モンゴル葬送文化視察 報告

二村 祐輔

70

活動報告

二〇〇五年十一月から二〇〇六年九月まで

74

第二部

儀礼文化フォーラム

—— 永遠の旅立ち ——

下村 侃
鳥井 松治郎 32

「あとに残された人へ」

谷 莊吉 49

カトリック教会を巡る五島列島の旅

福田 充 53

イザヤ53章と日本文学

—— 十字架の死と「もののあはれ」の文学における死 ——

上村 敏文 61

日本の文化と宗教心

藤井 高 67

S 治叔父さんに捧ぐ

杉浦 昌則 68



会長 浅香 勝輔

多くの国民が格差拡大に不安を抱くなかで、生活を脅かされている人びとのために、安全網をつくり直し、規制緩和に伴う過当競争から消費者を守る市場ルールや、監視機能を整えることが重要だとされる昨今の社会で、葬送というテーマを研究するとなると、いったいそれはどのような学問なのかと考え込んでしまう。

もちろん、特定の信仰を前提として、死後の世界や靈魂の存在を語るようなものではない。近代社会に生きる多くの人びとにとって、不可解・不可知なものである死に際して、人はさまざまなかたことを感じ考え、またさまざまなかたちで対処しようとする。

そうした営みは医療や看護・介護、葬式や墓地、セルフヘルプグループやカウンセリングに関わるものであったり、あるいは、死や死別をあつかうメディア上の情報やイメージであつたりする。

本会も一般論に流れやすい議論を、厳密な分析に耐えうるよう、これからはまず分析対象を絞り込むことが重要であるはずだ、という仮説を導いておこう。

大学という学問・研究の府にも、共生論や公共政策、都市デザインや社会デザインなどを研究テーマとする大学院が、国立の名門大学にも、近年つぎつぎと誕生している。かつて教授職にあつた学部で都市史を教え、現在は九州大学の大学院で、そういう新しい視座の学問と格闘している若い世代と一緒に、この会誌に論文を書き、彼の視点を強く出した。

三年間の会長職のあいだ、お世話になり厄介をかけたがら、なお支持していただいた会員各位に、あつく御礼を言上したい。ことに事務局という中枢になるお仕事に尽力された二村祐輔氏に深く感謝したいと思う。

九州諸都市火葬場の 歴史的位相の系譜

浅香 勝輔
井上 康時

序論

火葬場のクリエイティビティと九州

ここでは九州を取り上げる。ある特定の地域をみる場合、どこまでがその地域独自の歴史的展開であり、どこからが全国に共通する出来事なのか。このことに十分注意する必要がある。

筆者のひとりである浅香は、長らく歴史地理や民俗学的な視点で、火葬場を中心とする日本近代都市史の研究に従事してきたが、それは地域社会の視座から火葬場の歴史を考察する立場であった。

これに対してもうひとりの筆者である井上は、「多少なりとも九州全体を見渡した結論や総括を、どこかで提示する必要があるか」と言うのであるが、浅香は「ひとつの個

別の事例研究をいくら精緻に分析・考察してもそれで日本全体の総括は不可能である」と否定する。個別の事例研究はある程度の数をこなし、比較研究をして、さまざまなタイプ（類型）の存在を明らかにして初めて可能になるのである。

また、比較的簡単な指標で、全国的・全時代的な民俗や都市の変化の傾向を把握して、その中で取り上げた火葬場の位置づけが必要である。

ただ、第二次世界大戦で、長崎をはじめ壊滅的な被害を受けた九州の諸都市が、昭和の高度経済成長期をはさんで都市の復興に力を注いだ結果、火葬場にも大変化が展開している事実であろう。技術革新、燃料改革、モータリゼーションなどの用語が示している歴史過程で、九州の伝統的な商工業や農林水産業にたずさわる人びとの生活に大変化がもたらされ、火葬後進地を含めて、火葬場の激変があつた。それは日本列島全体に及んだ都市化の一環であり、九州各地の火葬場の近代化が、現在の都市型住民生活の波及の結果であることは、全国的な現在と一致している。そこに「平成の大合併」と呼ばれる市町村合併の動きが高まったことから、火葬場の経営形態の変容が進行していることが指摘できる。これは日本全国的な変化と同じ歩調であると言ってよい。

九州の火葬場の事例研究が増えることで、日本全体の傾向についての細部が明らかになることはもちろんであるが、そ

れも日本全体の事例研究、比較研究によつて、帰納的に導き出された結論である。

結局、昭和戦前期までの定形タイプ（例えば寺院風建築など）から形態的に離脱することができ、各種のタイプが出現することも、九州以外の各地と同様である。これは火葬炉という定型的な部位を具備しなければならないという宿命的な条件に制約されながら、九州も火葬場建築は定着、融合していく。その道程で、特に平成期に入つてから、社会的意味の大きさ、極限的ではあるが、ある意味で、社会的モニユメント性を帯びるに至つたと言つてよい。

遺体を焼却するという、環境問題を含めた自然科学的なテーマを、歴史や建築の研究のような文化研究に携わる者には、現状と理念との関連性はほとんど理解されていないという点が気になる。したがつて、当たり前ではあるが、自らの考察ではなく、二次的な情報に立脚しており、火葬場に関する人びとが発信する異なる情報を、それぞれ個別の目的に合わせて選択するので、学問・研究として枠組み確立はともできそうにもない。例えば、都市社会学や都市民俗学にどう対応していくかでさえ、おぼつかない。

ことに、心性の問題として、演歌にひかれたり、葬送のしめやかさに心打たれたりする、日本人の感情にまで、火葬場の研究は、社会学・心理学・民俗学の力をどのように借り、

どのように強調・融合していくかさえ、表明できないでいる。これは決して謙遜けんそんの辞ではない。都市施設とは呼ばれるものの、ある意味で、火葬場とはその都市や村里の興隆の歴史に浮かぶ「うたかた」のような施設であるのかもしれない。——九州も同じ感をもつ。

なお、具体的には、「平成の大合併」が終わり、大型化した自治体において、火葬場の担当地区の見直しや新設・廃止を迫られている地区は、九州では福岡県の築豊地区や、熊本県の島しょ部や、宮崎県の一部を除いて、本州の岩手県・秋田県・埼玉県・岐阜県・三重県・和歌山県・島根県、四国の高知県などと比べて、割合少ない。ただし、広域化の中で、行政区は広がつたのに、高齢化や過疎化の進行に伴つて、合併自治体により細かい対応が求められるケースが、前記の福岡県や宮崎県にはある。それらは、火葬場までの距離が遠いケースや、情報伝達に互換性がないなどの問題も顕在している。だが、隣接する自治体への事務委託、あるいは県境を越えての火葬場利用などで、速やかに解決できるケースが多い。

こうして小論は、九州での問題設定↓九州での仮説構築↓九州での仮説検証を通して、全国的傾向の中での九州をうきばりにし、今後の展望を含めた検証執筆という流れをとつた。結果は仮説を基本的に支持するものとなつたが、慎重に留保意見を含めた箇所もある。

本論としての各論 判断保留の踊り場で

1 転々と変わったトポス

福岡市 福岡市の火葬場の動きは複雑である。『福岡市史 第四卷 昭和前編（下）』（昭和四一年、四一〇ページ）に、「従来本市の龍頭崎火葬場は、薪を燃料とする旧式火葬炉が八基であったが、昭和五年四月、総工費三万六千余円を投じて、重油式火葬炉一基を増設した。のち昭和一七年三月〔四月の誤り〕に至って、福岡市松原に市立中央火葬場を設け今日に至った」とある。この時点で龍頭崎火葬場は廃止されたともあるが、その跡地は今日までどうしても分からない。史資料で追跡してみよう。

『福岡日々新聞』昭和五年五月二〇日付の紙面に「龍燈崎火葬場／昼間火葬／今日から実行」と題し、「福岡市龍燈崎火葬場の昼間火葬は昨十九日県の認可指令が有ったので今日から直に実行する事になった。それで今後は一時間余り待合すれば拾骨して帰れるという」とある。重油式火葬炉を設置した効果であったろう。

図1は旧・国鉄の九州鉄道管理局に残っていた、大正末期の博多港（龍頭崎）駅という貨物駅の平面図をコピーして掲

出するものである。

現在では、福岡市内に「龍頭崎」という地名は存在しない。しかし、「昭和初期の福岡市」という図2の市街図を詳細に読んでいくと、矢じるいを付した地点に火葬場がある。臨港貨物線の「新博多」と称する貨物駅は、図1の「博多港（龍頭崎）駅」ではなかったのか。そうすれば図2の矢じるしの火葬場が「龍頭崎火葬場」であったという推察も成り立つ。

昭和一七年に木造でつくられた福岡市立中央火葬場は、現在の南区松原の地で昭和三四年、すぐ南側に、福岡市葬祭場が鉄筋化されて完成すると同時に廃止となり、跡地はグラウンドとなった。

福岡市葬祭場は、灯油炉二〇基に対して、再燃焼炉は昭和五四年に七基を設置しただけで、種々の問題が絶えず、改修事に追われていた。近年では、パリアフリーに適さない

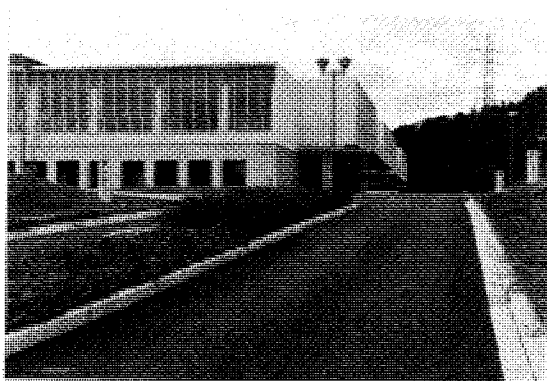


図3 新しい福岡市葬祭場 (H18.7.28)

博多港(竜頭崎)駅平面図 1:500

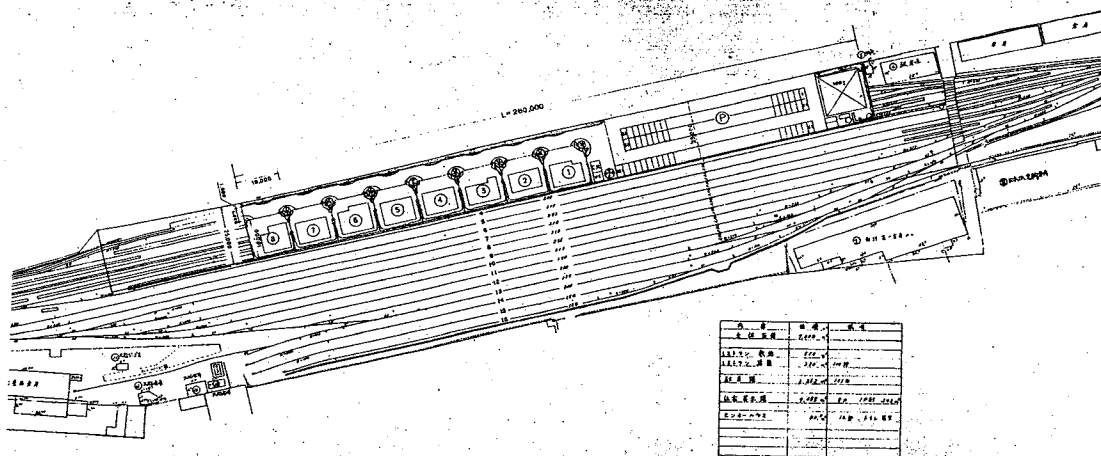


図1 博多港（龍頭崎）貨物駅の平面図

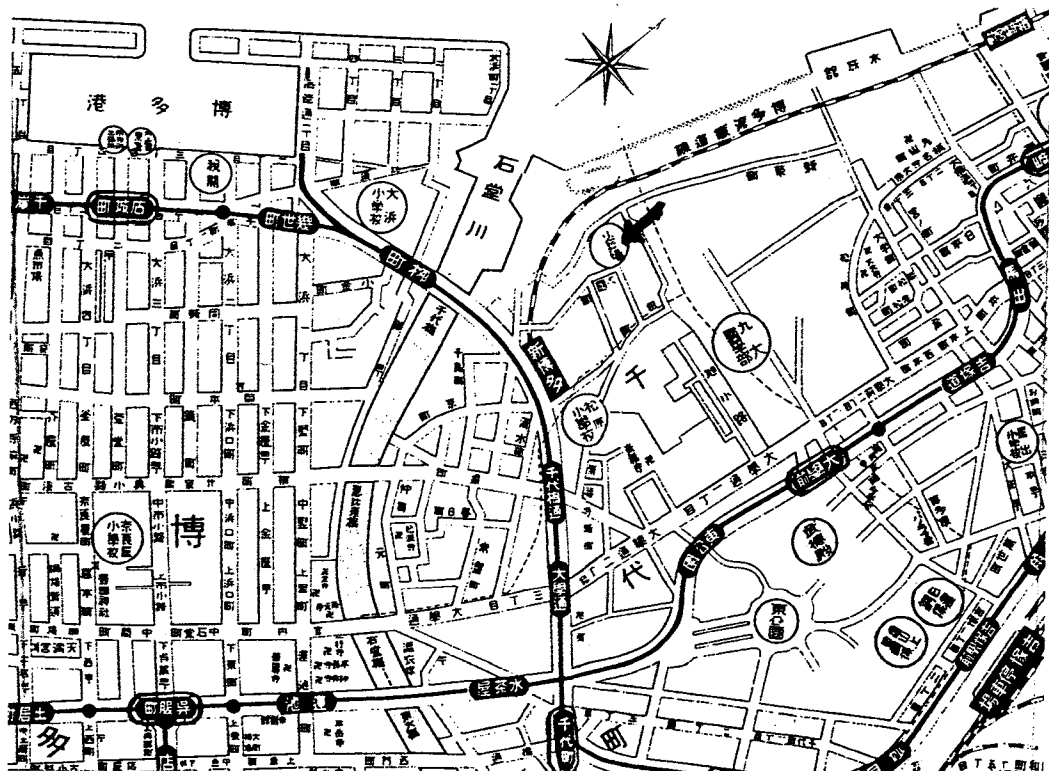


図2 幻の龍頭崎火葬場の所在 昭和15年

設計が問題となっていた。

福岡市は既設建物の南西部に新しい火葬炉棟を計画し、平成一六年四月から工事に入り、翌一七年一〇月に完成した。都市ガス炉二五基という新施設を撮った写真が図3である。

なお、昭和三四年に廃止されて跡地がグラウンドになっている場所から、新設された図3の建物まで、新旧施設の配置図を図4に掲示する。

久留米市（福岡県）現在の久留米市斎場へ連なる系譜の火葬場の歴史をたどると、大正六年一〇月一日に久留米市に合併された三潴郡鳥飼村梅満という地にあった火葬場に行き着く。国道二〇九号線の金丸橋の北詰、津福本町と梅満町の境界部に当たる、現在の川浪電工駐車場の位置に所在した施設である。

その火葬場を廃して、久留米市営の本格的な火葬場を建設しようとする動きが、大正末期より始まり、昭和二年六月一日から操業を始める。前述の梅満にあった火葬場から近く、当時の地番は津福本町一八六三ノ一で、元・鳥飼村の伝染病院の跡地である。この市営火葬場は、昭和三七年四月一日に、後述する高良内町の市営斎場が供用開始するまで使用された。

この津福火葬場のありし日の景観がしのばれる写真が『久留米の市勢』（昭和三〇年）に載っているもので、それを図5

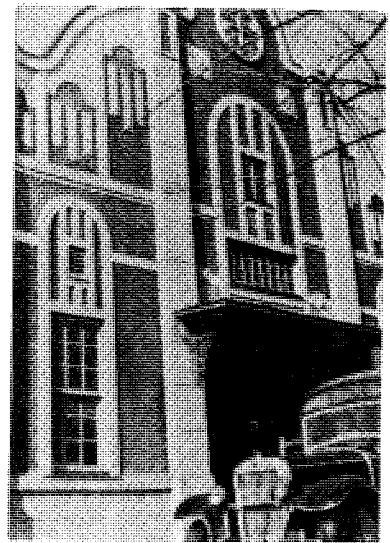


図5 津福火葬場
（『久留米の市勢』より）

に引用しておこう。正面入口の光景であろうが、木造モルタル塗りながら、そのファサードは注目に値する。

やがて昭和三七年四月一日に、市営火葬場は高良内町こううちに新設された斎場こうちに移ることになる。高良内は三井郡高良内村が昭和二六年六月一日に久留米市に合併されている地域である。

四十年以上も経って、同じ場所である。当初は

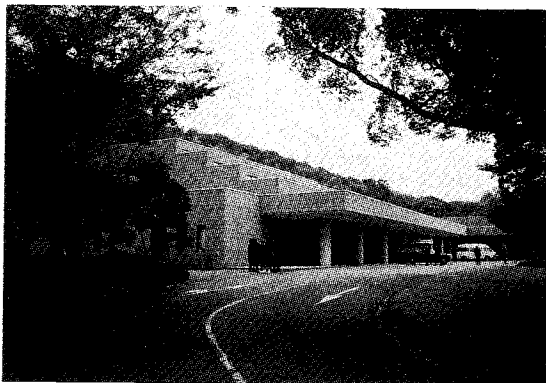
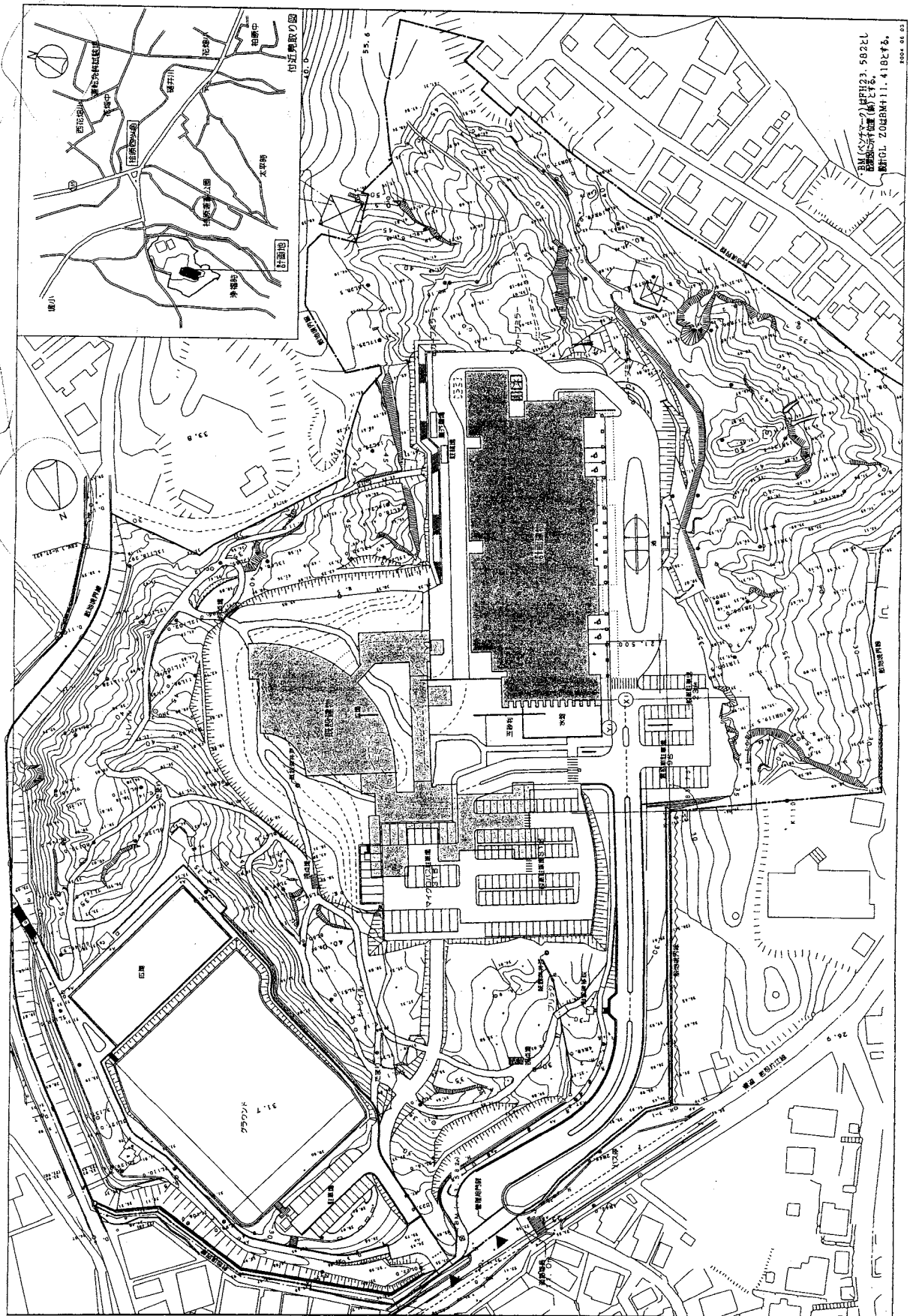


図6 久留米市斎場（H12.10.22）



国土地理院 地形図 1:50,000
 福岡市 5922
 縮尺 1:50,000
 縮尺 1:50,000

図4 福岡市の新旧葬祭儀配置図 (福岡市提供)

鉄骨造りであったものが、現在の鉄筋コンクリート造りの建物に改築されて稼働を開始したが、昭和六一年二月一日で、九州自動車道がこの場所の西側を走るようになったのと、ほぼ同じ時期である。

何の変哲もない建物であるが、図6の写真でも分かるように、上部を階段状に切り込むモチーフで、南面から何段にも自然光を採り入れている火葬棟の設計に、若干の特色がみられよう。

大牟田市（福岡県） 大牟田は三池港^{みいけ}や三井三池鉱山^{みつい}でも有名な町であった。「……あった」と過去形で記したのは、九年ほど前に三井三池鉱山は閉山されているからである。昭和三〇年代に三井炭鉱労組が、歴史に残るような激しく長期のストライキを展開している。

大牟田の市制施行は大正六年三月一日であるが、それ以前の大牟田町の時期から、現在の明治町の西端である健老町の、リサイクルセンターの近くに火葬場があったという。そのころは海辺であったと土地の高齢者は言う。

昭和六年六月に宝坂町に新築移転し、その近くに昭和八年一月八日に再移転したが、その位置が昭和五九年に供用廃止するまで、半世紀に渡って火葬場が存在した所であった。それまでは薪に石油をふりかけて火葬していたのが、ここに移ってから重油式になった火葬炉が、最終的には七基あった

という。現在の大牟田市斎場が供用開始したのは昭和五九年八月一日からである。

この火葬場は半世紀の間に、二回も焼失している。一回は昭和一二年九月二八日の早朝で、赤痢の流行で死亡者が続出し、二五日から昼夜兼業で作業をしたため、その過熱によって全焼したが、直ちに再建している。二回目は昭和二〇年七月二七日の空襲による戦火で焼失しているが、その年のうちに復興している。

半世紀にわたって火葬場が所在したのは、宝坂町二丁目一九番地の一で、この場所は図7でも分かるように、現在では大牟田市立総合病院の一面となっている。この病院がこの場所に移ってきたのは平成七年一月である。火葬場が昭和五九年に現在の黄金町へ移ったあと、この地にはしばらく三井鉱山大牟田支社があった。

市立総合病院はもと西接する不知火町三丁目の大牟田警察署の裏（北側）の、現在のマルシヨースーパーがある敷地にあった。「火葬場の跡に病院とは」という声もあったというが、三井鉱山大牟田支社が去ったあとの火葬場跡地へ、前述のように平成七年、病院は高層化して移転してきた。

筆者たちは綿密に病院周囲を観察した結果、地番も一致し、付近の葬儀社の主人から聞いた「かつての火葬場は、今の病院の東側の坂道を登って行った」という証言とを合わせ

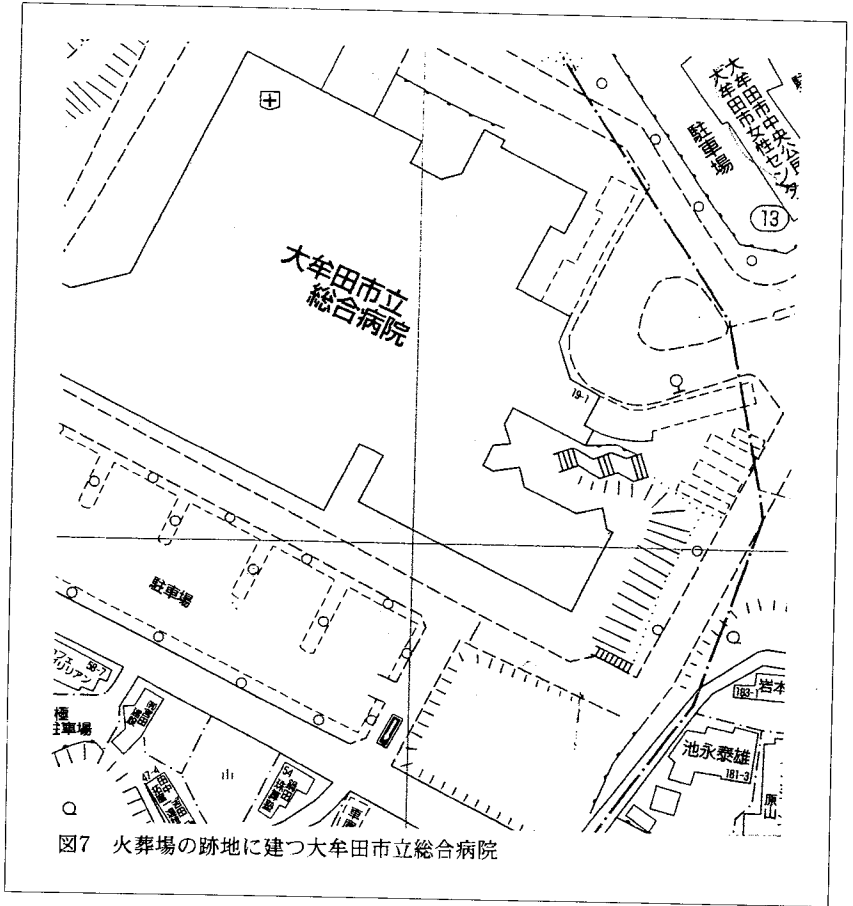


図7 火葬場の跡地に建つ大牟田市立総合病院

(図7参照)、往時の火葬場は、現在の病院の正面入口の前面の駐車場付近にあったのだらうと判定した。図8の写真はその場所をとらえたものであるが、中央の古くからあるらしい二本の樹木が、火葬棟前の霊柩車の回転するロータリーに立っていた樹木ではないかと推理するのである。

物もあつた。

一帯は、三井三池三

川鉦の関係者や船員な

どが行き交う繁華街と

して栄えた。通りを歩

ここから昭和五九年に移って行った火葬場は、大牟田市立葬祭場と称し、明るい近代建築で、黄金町二丁目二一〇番地の二にあつた。灯油炉六基という火葬棟は、公道からきわめて至近距離なのが気になった。

そこから隣の熊本県荒尾市の火葬場へと向かつたのだが、筆者たちは回り道をして、大牟田市の南端の県境に立ち寄つた。国道三八九号線の大牟田市白金町の白金町二丁目交差点から、三池港を右に望みながら、熊本県境まで約二キロメートルの三川通りを歩いた。途中に明治四一

年に建築された洋館の旧・三井倶楽部があつた。遊廓の跡らしい建



図8 大牟田市立総合病院付近の火葬場の跡地 (H18.7.30)

くと、シャッターが下りた店舗がぼつぼつと目につく。炭鉱住宅の閉鎖や、三井三池鉱閉山から、近年、急速に客足が引いたようだ。等間隔に並び立つ電柱と、まばらな人影が、真

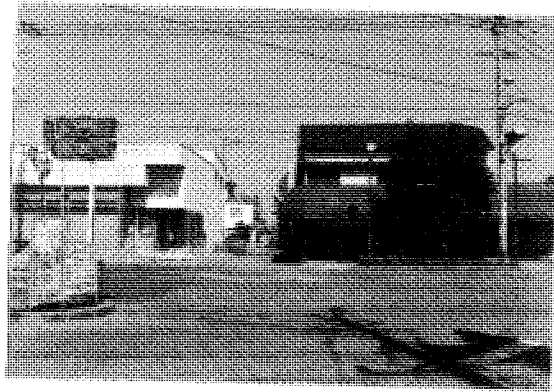


図9 大牟田市（福岡県・左）と荒尾市（熊本県・右）との県境の路地（H18.7.30）

夏の白い道に哀愁をただよわせる。

連担している町並みの途中の細い路地が、福岡県と熊本県との県境であるのには驚いた。山とか川とかが都県境になっていることが当たり前と思いついでいる関東人にとって、これは珍しいことであつたので、直ちにシャッターを切つたのが図9の写真であり、このあと県境を一步越えて、タクシーをつかまえ、荒尾市の火葬場へと走つてもらつた。

2 戦前・戦後の連続性

長崎市 造船の街から、平和都市、観光都市へと変容してきた長崎市においては、歴史的に同じ場所に火葬場が所在して

いる。大正一〇年、長崎市営火葬場が竹の久保町（現・淵町）に設けられ、昭和一〇年に炉を増設したあと、昭和二〇年八月九日の原爆で被災し全壊焼失している。

その後、同じ場所で応急的に復興を進め、石炭・薪兼用火葬五基の一棟と、重油・薪兼用火葬炉六基の一棟との二棟に分けて、二本立てで操業していた。この時期の、おそらく昭和三〇年代に出されたものと考えられる「長崎市営火葬場要覧」と題する一〇ページほどのパンフがあるが、その表紙に、当時の二棟に分かれている火葬棟と全体景観をよくとらえている写真が掲出されているので、図10に掲示しておく。現在の地形と比較するのによい。

しかし、この火葬場も昭和五〇年をむかえるころには、老朽化も激しくなった。そこで昭和五三年一二月に、鉄筋コンクリート造りの長崎市営火葬場が完成する。このときに発行された「長崎市営火葬場」というパンフの二ページめに、当時の長崎市長であつた諸谷義武氏が「ごあいさつ」として記している記事に、近代化の事情がよく表現されている。

美しい緑につつまれた稲佐山の山麓に、昭和五一年度から建設を進めておりました長崎市営火葬場が、地元のみならず、市民の方々のご理解とご協力により完成いたしましたことは、誠に喜びにたえません。

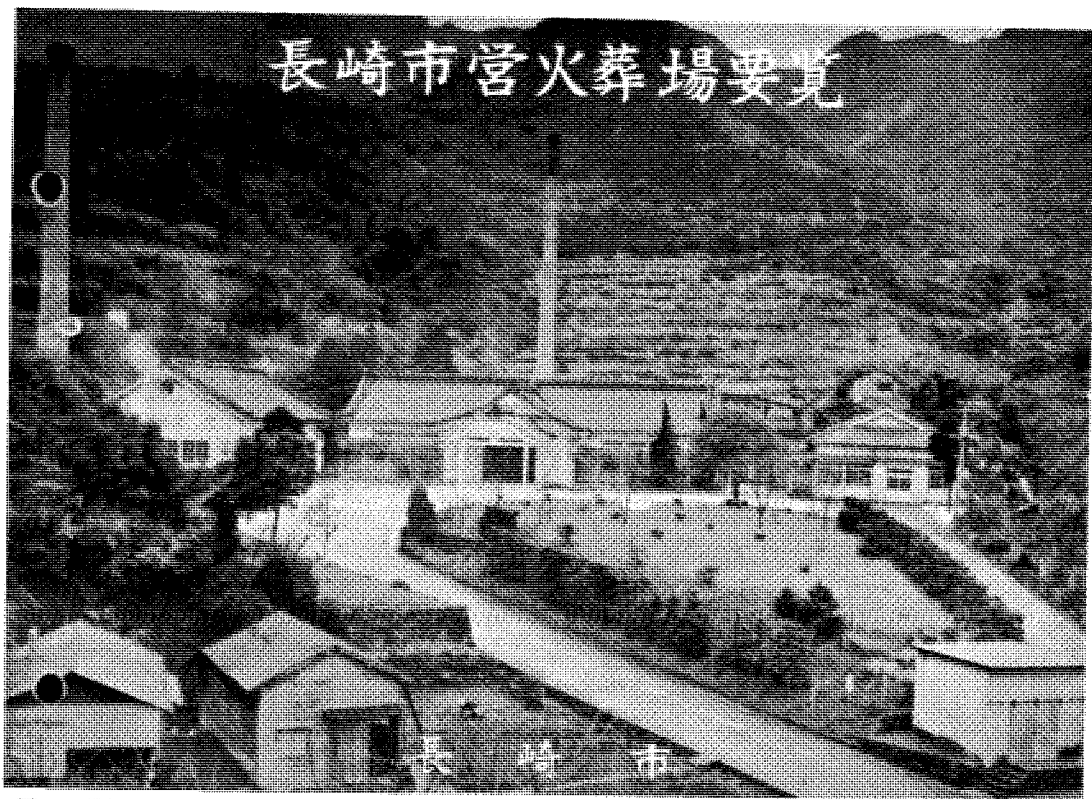


図10 戦後復興した時期の長崎市営火葬場

従前の火葬場は、大正一〇年に建設されておりましたが、原爆による被災によって全壊し、その後、直ちに再建された施設でありましただけに、近年、極度に老朽化が進み、全面的に改築することにしたのであります。

新しい建物は、細心の配慮を加え、近代的な施設にいたしておりますとともに、火葬炉につきましても、炉ごとに再燃炉を併設して、無公害と環境保全の対策に特に意を介しております。

今後、この市営火葬場の運営にあたりましては、尊厳と品格の保持につとめ、市民の方々のご期待に十分に応えてまいりたいと存じます。〔下略〕

右の市長の挨拶文が載っているこのパンフの表紙の一部を掲出したものが図11であるが、「長崎市営火葬場」と印刷された文字が、その上にゴム印で、「長崎市もみじ谷葬祭場」と訂正されている。この時点で、地元の通称を採用して「もみじ谷」という美称系の呼び名となつたらしい。

この火葬場は現在も稼働中である。灯油炉一一基という炉数は、原爆被災前の、石炭・薪兼用炉五基と、重油・薪兼用火葬炉六基の合計と、奇しくも一致する。平成一八年の盛夏、筆者たちが訪ねたとき、図12の写真のように待合室増設工事中であった。

長崎市もみじ谷葬祭場
長崎市営火葬場



図11 長崎市もみじ谷葬祭場の出発

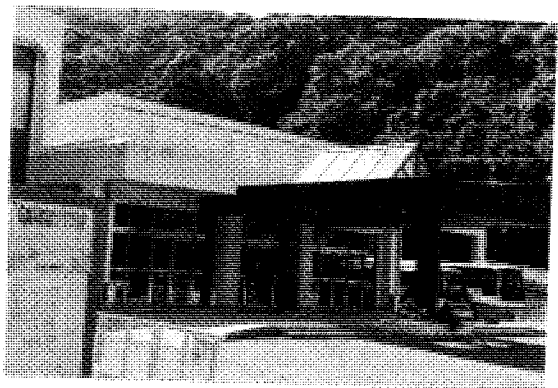


図12 長崎市もみじ谷葬祭場 (H.18.7.30)

中津市（大分県） 厳密に言えば、正式の名称が「中津市・三光村 風の丘葬祭場」で出発している。中津市と下毛郡三光村の広域の火葬場であった。だが、三光村も含んだ下毛郡本耶馬溪町・耶馬溪町・山国町の三町一村と中津市が、平成一七年四月一日に合併したので、現在では「中津市 風の丘葬祭場」となっている。

昭和戦前期からあった木造の中津市の火葬場を造り替えるにあたって、南接する三光村と広域を組み、そのときの設計を、著名な建築家である楨文彦氏（楨総合計画事務所）に依頼した建築物として有名になった。そして、一つの火葬場

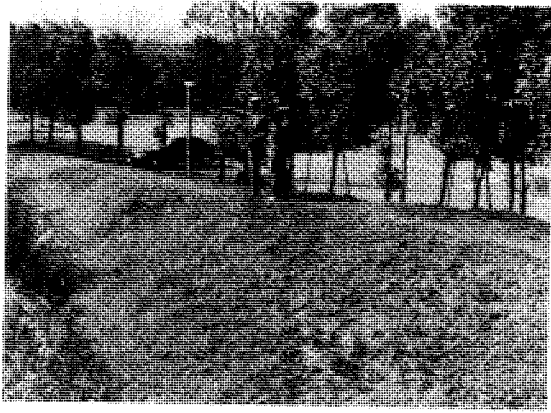


図13 旧・中津市火葬場の跡地 (H15.3.21)

が、著名な建築家の手になる作品のために、その優秀さとも世にむかえられた空前絶後の現象であったことも付け加えておこう。

この建物の南西方の地にあった旧施設は、規模や衛生の面で、周辺住民から改善が望まれていたので、中津市は三光村と一緒に、その周辺の「風の丘」の地に新設した。図13の写真は、旧施設の跡地付近である。

火葬場と言う「機能的な施設」を、槇氏は芸術的に豊かな内部空間と象徴性をそなえた建築として示された。平成八年八月の開場で、灯油炉五基の火葬場である。華美な火葬場が

増えている時期に、そういう傾向を抑止する意味もこめられた火葬場は、やはり槇氏でなければ設計できなかったのではないか、と思われる。

古墳が数多く発見されている由緒ある地域の、風の丘広場と呼ばれる特有の敷地に、火葬という非日常性に向

かう人びとの心理までもとらえて完成された作品（施設という用語

を使うのがもったいないくらいの……）であり、それを象徴的に表現した言葉が、雑誌

『GA JAPAN』の二七号（平成九年）のタイトルに使われている「静かな感動の集積」という八文字に凝縮されている。

敷地は中津市の南郊で、平野から丘陵へ切り替わる区域にあり、ここから遠く市街を越して、周防灘の青い海が見える。図14の写真はその火葬棟の入口である。

この風の丘葬祭場については、建築系雑誌掲載資料をたくさん検索できる。五つばかりのリストと掲載年月を順不同にあげておくと、『新建築』（平成九年七月号）、『日経アーキテクチュア』（平成九年六月三〇日号）、『SD』（平成一〇年九月号）、『GA JAPAN二七』（平成九年七月〜八月）、『GA JAPAN一八』（平成八年一〜二月）な



図14 風の丘葬祭場火葬棟入口

どである。いずれもデータシートなどに、火葬炉メーカーの会社名などが、れいれいしく出てこないのがよい。

延岡市（宮崎県） 宮崎県北部の中心都市である延岡が、大きく近代都市に変貌するきっかけとなったのは、大正一二年に日本窒素肥料（現・旭化学工業）のアンモニア工場が創設されたことによる。昭和八年二月一日に市制施行。人口も昭和一四年には約九万人となり、県内最大規模の都市に成長した。

こうした発展途上で延岡町は、昭和期に入って火葬場を持つ。昭和二年五月のことで、当時の東臼杵郡恒富村塩浜町に建設された。恒富村は昭和五年四月一日に至って、東臼杵郡延岡町と合体する。狭い敷地で、市制施行後、敷地を拡張し建物も改築するが、火葬炉は従来どおり四基で、寝棺用・座棺用各二基づつあった。昭和九年四月に電灯二個を設置したという記録が残っており、それまでは電灯設備もなかったようであった。

昭和一六年に火葬炉四基を増設、それに伴う改築工事を翌年に完成しているが、戦後の昭和三十一年三月三〇日、火災によって全焼。建物はただちに新築したが、炉は修理を重ねながらその後も使用し続けた。

そうこうするうちに建物、施設ともに老朽化が激しくなり、全面的改築となった。昭和四五年七月に、鉄筋コンクリ

ート造、重油炉五基の新施設が完工するが、市民生活の変化に対応するため、火葬場の前庭に斎場を併設した。この斎場の利用者は、当初計画の時点での予想よりはるかに少なかったという。

せつかくの新施設ではあったが、延岡市の都市づくりの目標が確定し、都市整備事業推進の一環として、火葬場をより適切な場所に移転させることが決議され、新施設は十年も経たないうちに供用廃止となった。

新しい延岡市営火葬場「悠久苑」は、市街地中心部から東北方ほぼ一〇キロメートルの地点で、国道三八八号線の追内

バイパスの国道沿いにできた。図15の写真のように鉄筋コンクリート造りで、灯油炉六基で、火葬炉は番号ではなく、「イロハニ：」である。正面は谷で、周囲は緑に包まれた静寂な地である。

この所在地の行政区は、建設以来、東臼杵郡北川町の長井野鶴で

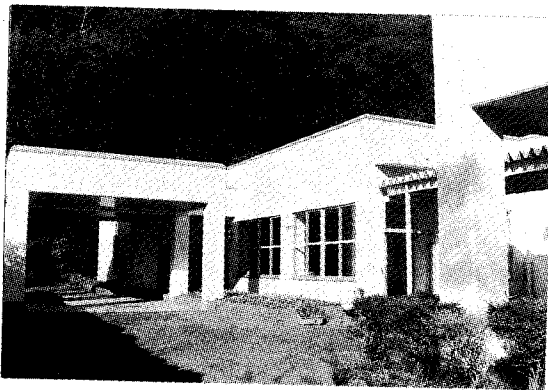


図15 延岡市悠久苑 (H15.10.25)

あつたが、平成一八年二月、「平成の大合併」で北川町は延岡市と合併した。

この火葬棟の国道寄りに、全国の火葬場でも珍しい「胎盤供養塔」というものが建てられていて、傍らの石に由来が刻まれているので、以下に写し取って引用しておこう。

胎盤供養塔縁起

生物の命の誕生には、胎生、卵性、湿生、化生の四生「仏教観」があります。万物の霊長といわれる人間としての命をいただき誕生することはすばらしい事だと思ひます。

結婚、妊娠、そして出産するまで胎児は母の胎盤のおかげで栄養の補給を受け老廃物は取り除かれることを知らされるとき、その偉大なる自然の摂理を感じます。晴れて出産、あとはうつせみの如き胎盤の宿命ですが、胎教の言葉の如く、妊婦の精神的感応が胎児に影響することを信ずるとき、出産後の胎盤に感謝し真心をもって処置することは助産婦の道義であると思ひます。ここに胎盤供養の塔を建立し敬虔なる合掌を捧げます。

よき花は よき根で育ち よく香る

昭和六十三年十一月吉日

延岡市助産婦会

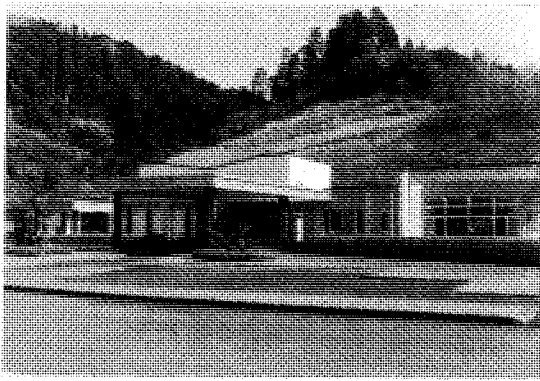


図16 串間市葬祭場 (H.18.3.31)

供養塔の玉垣には、「たべもの、のみものをお供えしないで下さい。」と小さな立看板が添えられている。

なお、昭和二年から五七年まで旧・火葬場があつた塩浜町の跡地は、現在では運動公園として活用されている。

串間市(宮崎県) 宮崎県の最南端、ということは大隈半島の付け根の所に当たるといふことになるが、鹿児島県との県境に接して串間市がある。西隣の町は鹿児島県曾於郡志布志町である。

串間市は昭和二九年一月三日、南那珂郡福島町・大東町・市木村・本城村・都井村の一町四村が合体して市制施行した。農林水産業の町で、特産はさつまいもである。

この市域の火葬場は古く明治三三年に、旧・福島町九一三九番地に建てられたという記録が残っている。串間市になってからは、市役所の庁舎の山手の西方という地で長く操業していたが、平成三年に南方という場所に

移転し、図16の写真のように鉄筋コンクリート造りの建物と
なっている。灯油炉二基であるが、アクセス道路から場内へ
入る地点で、上部を遮る呪術的なオブジェがある。

みやこのじょう
都城市（宮崎県） 宮崎県西南部、鹿児島県境の都城盆地に
位置する。大正一三年、県内では宮崎市と並ぶ最も古い市制
が施行。第二次世界大戦前からあった各種軍事施設は、戦
後、陸上自衛隊の駐屯地となった。現在は、JR西都城駅東
側の上町、中町を中心に百貨店や中心商店街があり、商圏に
鹿児島県東部の一部を含みつつ、宮崎県南西部の中心都市と
して発展。畜産、水稻、畑作など農業が盛んな都市でもあ
る。

この都城市の火葬場の歴史を、簡潔に石碑に刻んで、現在
の斎場の一角に開示している。このような例は全国でも数少
なく、市の努力と懇切さを評価してよい。まずその碑文を次
に掲げる。

旧火葬施設は、昭和十年願藏寺により設置された施設を
昭和十九年に市が買収し現在地に建設したものであった。
これは他所への移転を前提とした暫定的な施設であり施設
全体の設備や処理能力のうえからも改善が必要であった。

このような状況の中で都城市と、地元関係者で結成した
都城市斎場建設対策協議会は、連日連夜協議を重ね昭和六

十二年三月現在地を中心に新斎場を建設することに合意し
た。

このことは、都城市の熱意あふれる努力と地元住民の人
類愛を根源とした絶大なる理解と協力の賜であり、落成に
あたり限らない敬意と感謝を捧げ碑文とする。

平成二年三月二十一日

右の碑文を補足するかたちで説明すると、明治二二年に町
制がしかれると、都城町営として現在の北原町に、旧式な火
葬場が設けられたようで、主として伝染病による火葬処理を
目的としたらしい。

しかし周辺に民家も建ち始め、環境整備のため移転するこ
とになり、昭和五年、市内下長飯町四〇一〇番地に改築移転
している。次の願藏寺所有の火葬場が出現する付近であった。

願藏寺の火葬場は下長飯町南墓地西南端にあった。その創
設は、右の碑文の冒頭に昭和一〇年とあるが、一説には昭和
一三年という記録もある。前記の、市が下長飯町に移転した
市の火葬場と、この願藏寺の火葬場とは、至近距離というこ
ともあって、戦時下に、競合が指摘されたらしい。

そこで昭和一九年四月、市は願藏寺の火葬場を買収して移
転、従来の市の火葬場を供用廃止している。この敷地内で火
葬場の位置は、若干移動している。

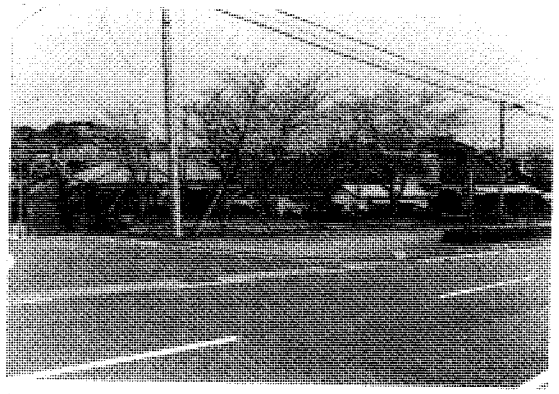


図17 都城市斎場門前の旧・火葬場跡地 (H18.4.1)

が、昭和一九年の願蔵寺の火葬場買収時から、平成二年に現斎場が完成するまでの火葬場があった跡地である。新設道路によって敷地が分断されたことがよく分かる。図17の写真は、サクラ咲く季節にその跡地をとらえたものである。さきほどの碑文が教えてくれる。平成二年三月に完成したという、鉄筋コンクリート造り、現在は灯

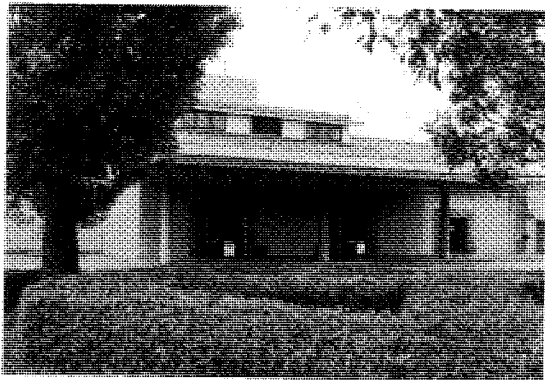


図18 都城市斎場 (H18.4.1)

現斎場へのアクセス道路は、平成一八年三月に新設されたもので、国道一〇号線の甲斐元の交差点から南へ入って右折、梅北川を上樋通橋^{かみひどおり}で渡り（ここからが道路新設）、斎場へは左折で入るが、そのときの右側にサクラの木がある空地

油炉八基という火葬棟の外観は、図18の写真のとおりである。

3 既成市街地からの離脱

佐賀市 佐賀市火葬場は昭和四年九月から、現在の大財^{おおたから}四丁目にあった。佐賀市はいわゆる「昭和の大合併」で、昭和二九年から三〇年にかけて、近隣の町村を合併しているが、そのとき合併前の旧町村や集落の火葬場を、ほとんど引き継いでいる。昭和三二年末の火葬場一覧が『佐賀市史 第五巻（現代編）』（佐賀市、昭和五六年）の七〇六ページに掲載されているが、その数は前記の大財にあった中央火葬場以下、一一カ所もあった。中央火葬場以外

は、いずれも薪炭炉一基づつの小規模火葬場で、合併後はほとんどが中央火葬場を利用したために、旧町村所在の施設は全く利用されず、自然消滅のかたちをたどっている。右の大財にあった火葬場がまだ操業中

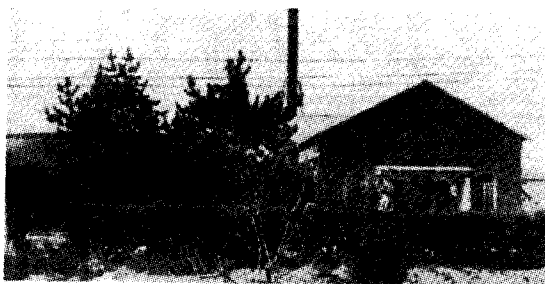


図19 往時の佐賀市火葬場
（『佐賀市史 第5巻』より転載）

あつた時期の建物の写真が、前記の『佐賀市史 第五卷（現代編）』の七〇七ページに掲載されているが、それを転載したものが図19である。

この火葬場は、重油炉三基と重油石炭兼用炉三基との計六基で操業していたが、歳月の経過に伴い、施設の老朽化ははなはだしく、市街地の中心部となつてきたので、他所に移転することは、市町村合併当時からの問題であつた。

長らく市は北部山間地への移転・新築を検討してきたが、その実現をみたのは昭和五五年になつてからであつた。市域北部の金立という所に移転し、灯油炉六基で「つくし齋場」と称するに至つてゐる。



図20 佐賀市つくし齋場 (H16.7.29)

中高一貫の進学校で著名な弘学館高校の東隣の地で、図20の写真はその正面入口である。

なお、旧・佐賀市火葬場の跡地は大財公園となり、その一隅に鎮魂碑が建てられている。

唐津市（佐賀県）地場産業の興隆などで財政的に余裕があつた都市が、

昭和戦前期に地元の火葬場の建設に熱意をもち、当時の木造建設のいわば「粋すい」を集めてつくつた火葬場建築が、十年ほど前までは、なお現役として使用されていた例は、この唐津市のほかに福井県福井市や長野県岡谷市などに散見できた。これらの前に立つと、現代の鉄筋コンクリート造の無機的な火葬施設を全部忘れさせられ、ひととき、ファンタジーの世界へ誘い込まれるような気分になつた。唐津のその火葬場も、もう無い。

昭和一〇年八月に、唐津市の二夕子という地に「衣干山火葬場」として創設され、重油炉三機で、平成一一年一月九日の供用廃止の日まで、およそ六三年間、操業し続けた。

木造真壁しんかべ、漆喰塗りの外観は、図21の写真のようであつたが、陰影に富んでいた。花頭窓かとうまどをはじめデザインが細かい。内部に入ると告別室。天井の趣向とシャンデリアの見事さは、花頭窓の清々しさとともに、クラシッ

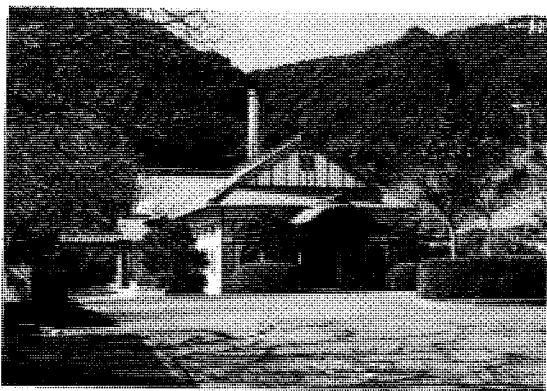


図21 往時の唐津市衣干山火葬場 (H9.2.23)

クな感動さえかきたてられた。正面出入口は、格子戸・飾り電灯・軒の梁などに、戦争期に入る直前の当時の重厚な木造建築が火葬場にも反映していて、しみじみ美しいと思った。遠い日の木造建築には、このような内実の緊張もあったことを、ここで改めて教えられた思いがあった。

わが国のかつての火葬場建築の原点のようになってしまった記念碑的なこの施設も、ついに供用廃止されてしまった。市街の果ての山ふところの所在にも、市街地化が迫ってきた

ことと、旧式な炉の効率の悪さが難題となった。



図22 唐津市火葬場大平山斎苑 (H12.10.21)

唐津市が平成一〇年五月からの工期で、市域西部の山間部の大平山やまの山麓に建設していった新施設が完成した。唐津市火葬場「大平山斎苑」という名称で、唐津市神田大字大平九七〇番地の三一六に所在、鉄筋コンクリート造、灯油炉四基で、旧・衣千山火葬場が供用廃止した翌日、平成一一年一月一〇日から供用開始

した。

この火葬場の構内からは、唐津の市街地や唐津湾が一望でき、眺望絶景の地を選んだといえる。図22の写真はその建物の正面であるが、向かって右手が火葬棟である。

熊本市 熊本市には明治末期に上河原という所に火葬場があった。日露戦争でのロシア兵捕虜の收容所が熊本市内にあったらしく、哀感に満ちた記述が、旧版の『熊本市史』（昭和六年、八一八ページ）に載っている。

時には彼等の中にも、異国の空で病死する者がある。かかる時、数百の俘虜達が、戦友を弔ふ哀調に満ちた讚美歌を合唱し乍ら、いとしめやかに町中を通して、上河原の火葬場へと死者を送る手厚い哀しい葬列が通って、一掬の涙を催させられる様な事もあった。

その後、熊本市には小島下町の小島と、川尻の二カ所に火葬場が設けられた。小島の消長は不詳であるが、川尻は昭和四四年に始まって昭和六二年に終わっている。

現在のように戸島町の総合霊園の中に、熊本市斎場が鉄筋コンクリート造で完成したのは昭和四七年一月二月であった。市の総合霊園の造成計画は、付近一帯の自然の山野を生かして、遊園施設も備えた市民のレクリエーション地域としたい

発想だった。まずはその中核施設として市斎場が誕生したというものであった。

その火葬場のありし日の光景は図23の写真のとおりであるが、重油炉九基に対して再燃焼炉は二基であったから、早晩、施設の改築が要求された。

それから三〇年余、平成一一年一月に現在の近代化された新しい設備を整えた新しい熊本市斎場を、それまでの施設の裏側に建設した。旧斎場の約三倍の規模に拡充したが、火葬炉も灯油炉一五基となっている。その新斎場の火葬棟をとらえた写真が図24である。

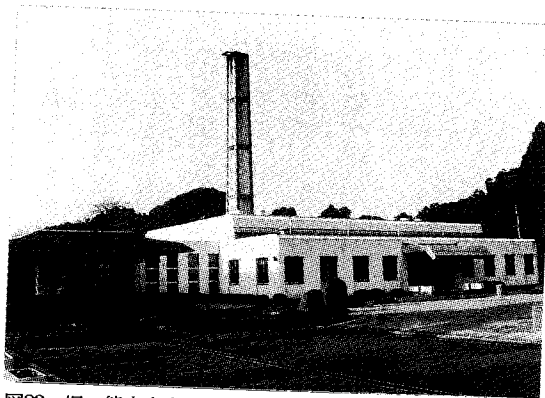


図23 旧・熊本市斎場 (H8.2.10)



図24 熊本市斎場 (H15.3.23)

大分市 昭和戦前期には県庁所在地として、人口の膨張に伴う死亡者の増加に対しては、火葬場を市内の上野と西大分に設けていたという記録に接することができる。このうちの西大分の火葬場を描出した昭和一五年の大分市街図がある。

昭和一五年といえば、大分市の市制が施行されてからほぼ三十年。県都として市街地の発展も目ざましく、充実してきた時期であったろう。にもかかわらず、図25のように、火葬場は当時の市街地の端の山と山の間にはさまれて、墓地の奥に所在する。現在の東八幡のあたりである。

第二次世界大戦後になって、東部の滝尾地区の下郡にも火葬場を新設し、「これは特に近代的な様式によって、従来の火葬場とはちがった明るい感じをもたせた」(『大分市史 下巻』(大分市役所、昭和三一年、一一〇ページ)とある。下郡一六〇八番地の一に、東部火葬場と称し、昭和二七年一〇月から所在し、石炭炉七基で操業していた。その跡地には図26の写真のように、現在では下郡運動広場となっている。JR日豊本線の大分―牧間の牧跨線橋を南へ下りた地点である。

また、現在の鶴崎地区にも火葬場があった。鶴崎はもとも大分市の東側にあった独立した町であった。昭和二九年三月三日、いわゆる「昭和の大合併」で、大分郡鶴崎町・明治村・高田村・村岡村・川添村の一町四か

村が合併、即日市制を施行し、鶴崎市が誕生した。市制を施行した鶴崎市は、ただちに火葬場の建設に着手し、翌三〇年一月、迫一一九六番地の四に、薪炉三基の施設をつくった。もちろん木道のバラック建築である。火葬炉と同じ棟に待合室があり、天候の悪い日など、同行した遺族たちが二時間半にも及ぶ火葬時間に難儀した、という伝説がある。

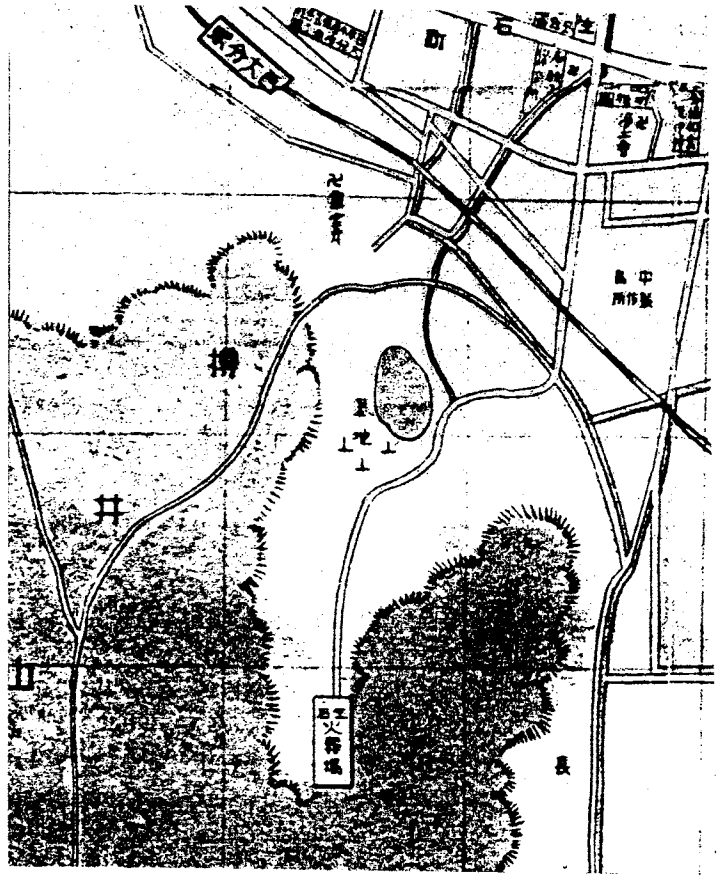


図25 昭和15年の大分市街図にある西大分火葬場

一つ目の信号を西へ曲がった左手、山津運輸機工という工場の西側にある。南の方向にニュータウン葛木が広がる。往時の火葬場の荒涼さを、充分に忍べる跡地である。

さらに、大分市にはもう一カ所、小さな火葬場があった。大在おおぞいの火葬場である。所在地の記録は、浜九一二番地の一。大在という場所は、JR日豊線本線の鶴崎から一つ宮崎寄りにある駅である。

その大在駅の海側に国立大分病院があり、その近くで浜町という町名を見つけ、浜という小学校も目撃したが、ついにその火葬場の跡地は尋ねあぐねた。記録によると、鉄筋コン



図26 東部火葬場の跡地 (H15.10.26)

る。

やがて鶴崎市は昭和三八年三月一〇日に、大分市と合体し、この火葬場も大分市に移管され、先の東部火葬場と同様、後述する大分葬祭場が開業する前日まで稼動し続けた。その跡地は図27の写真のように、国道一九七号線が乙津橋を渡る二つ西側の信号を南に折れ、

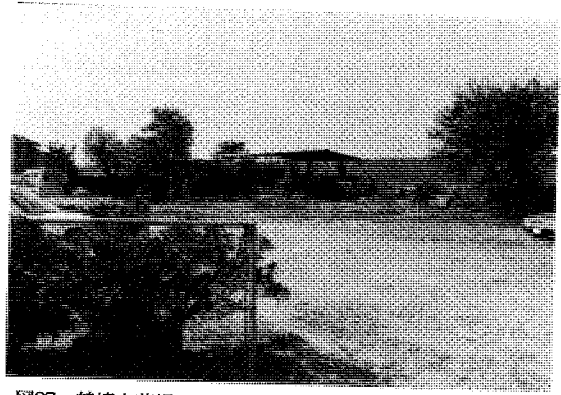


図27 鶴崎火葬場の跡地 (H15.10.26)

クリート造で重油炉一基の小規模な火葬場で、昭和三八年三月の創業である。ということは大分郡大在村当時からその所在であるから前記の国立大分病院との関わりも調べてみないといけない。この火葬場は昭和四八年六月から、勤務者が欠員のため休止となっていた。

以上の東部火葬場、鶴

崎火葬場、大在火葬場が老朽化し、さらに火葬システムが旧式なため、煙や臭気が市街化した周辺地域の環境問題にもなつて、三つの施設を一カ所に集め、移転新設することになった。大分市が建設主体となり、大分郡挾間町、同郡野津原町を含んだ広域事業として、昭和六一年八月から建設にかかった。

新葬場は、大分市竹中の九万平方メートルにも及ぶ広大な敷地に、鉄筋コンクリート造りの斎場棟・火葬棟・待合棟が回廊でコの字形に結ばれている。ほかに車庫や野外トイレなど。駐車場(二〇〇台)、日本庭園、洋風庭園なども。

場所は国道一〇号線

の白滝橋北交差点から県道中判田犬飼線を南へ、進入道路でJR豊肥本線と立体交差する跨線橋を越えた西の丘陵地。周辺は山林に囲まれている所である。

図28の写真はその新葬場の火葬棟の正面である。火葬炉は灯油炉一五基。昭和六二年一

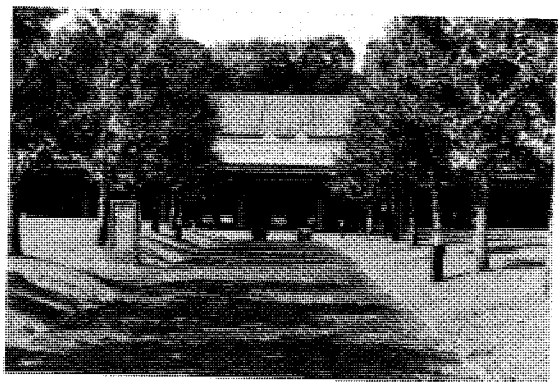


図28 大分葬祭場 (H13.10.6)

〇月一〇日から供用開始している。

さて、さきほど鶴崎の所で記した国道一九七号線には愛媛街道の名があり、かつては伊予街道・関往環とも呼ばれ、大分城下と佐賀関を結び、さらに佐賀関からは海路伊予に通じる道として重要視された。

きたあまべ

北海道郡佐賀関町は大分市から国道一九七号線で東へ二五キロメートル、別府湾と臼杵湾を分ける佐賀関半島の尖端部にある町で、豊後水道(豊予海峡)を隔てて、四国の佐田岬半島と相對しており、瀬戸内海の南西の入口に当たる。佐賀関湾と佐田岬半島先端の三崎港の間の距離は、海上三一キロ

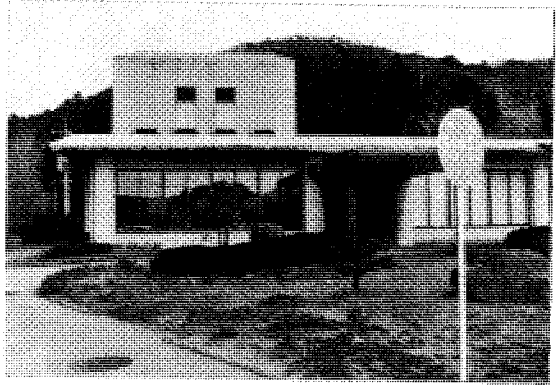


図29 大分市佐賀関火葬場 (H14.2.16)

メートルである。「平成の大合併」で平成七年一月一日、この佐賀関町も大分市に合併した。

佐賀関町には銅などの製錬で名高い日本鉱業佐賀関製錬所が大正期から所在した。製錬所の従業員の動向が、地域に与える影響には大きいものがあり、佐

賀関町大字関二八六五番地の現在の地に、佐賀関町火葬場が創設されたのは昭和二十七年一〇月のことで、昭和五八年に図29の写真のように鉄筋コンクリート造に改築され、灯油炉二基となっていたが、大分市に合併され、「大分市佐賀関火葬場」となり、そのまま操業中である。

宮崎市 宮崎市の市制施行は、大正一三年四月一日で、山口（市制施行は昭和四年四月一〇日）や浦和（市制施行は昭和九年二月一日）とともに時期的に遅く、かつて「県庁所在地の町」と揶揄された。

宮崎市営の旧・火葬場があった所は、宮崎駅を出て間もな

く上りの日豊本線が西側を走っていた、下原町三九四番地であった。列車の窓から火葬場の高い煙突が眺められたという記述にぶつかる（『宮崎市史 続編（下）』宮崎市、昭和五年、一〇三六ページ）。正確な設立年代は不詳であるが、大正一五年と昭和一六年に改築したという市の記録に接し得るが、大正期の初め頃からの古い所在であったのだろう。第二次世界大戦後まで薪を燃料としていた。火葬炉が重油バーナーに変わったのは昭和三七年からであったという。

火葬場の跡地は、いまでもJR日豊本線の軌道に沿った場所にある。日豊本線のこの区間は単線高架化され、往時の軌道跡はその西側に張り付いて遊歩道となっている。

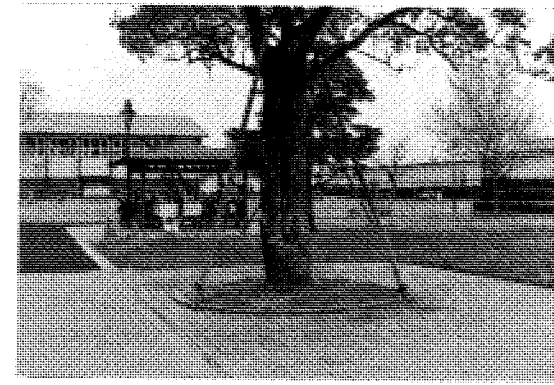


図30 宮崎市営火葬場の跡地 (H18.4.1)

火葬場の跡地は、「下原ふれあい広場」となっている。図30の写真の休憩所のような東屋あずまやのある所が火葬炉があった跡で、その右手（南寄り、たばこ工場側）は遺灰の山になっっている所だった、とその東屋で憩う土地の高齢者が教えてくれた。

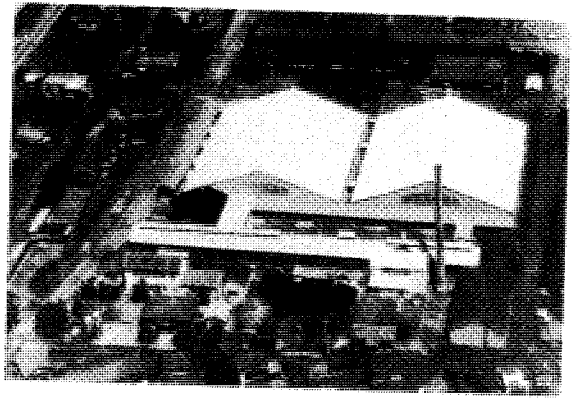


図31 旧・宮崎市営火葬場の南隣にあった
旧・専売公社の宮崎原料工場（川合一郎氏提供）

この跡地の北隣には、現在では宮崎県土地改良会館が建っているが、南隣には専売公社（現・日本たばこ産業）のたばこ工場（乾燥工場）があった。この工場は昭和二四年三月に建設された「宮崎原料工場」で昭和五三年三月に廃止、され、いまも

その廃屋めいたものが残っている。

事実、『たばこ専売史 第六卷（下）』（日本たばこ産業、平成二年）の八一ページには、外観が似た二棟の大きな建物がある同工場の操業していた時期（昭和三四年）の写真が掲載されており、それを転載したものが図31である。

建物左側に鉄道の引き込み線らしきものが見える。火葬場はこの写真の上部（北方）に所在したはずであるが、判別は不可能である。この写真に見える引き込み線は、宮崎駅の貨物ホームから敷設され

ていたもので、現在も軌道の残存している個所も確認できる。

九州の火葬後進県の県庁所在地のこの都市に、近代的火葬場が建設されるのは、そのあと意外に速い。昭和四四年に鉄筋コンクリート造で、公園化された場所に、閑静で明るい火葬場が完成したのは、九州の県庁所在地の都市では最も早い。宮崎市葬祭センターという名称で、所在地の郡司分くじぶんに建てられたのであるが、再燃焼炉の完備などのために平成八年に大改造を実施している。図32はその時期にとらえた写真であり、図33は平成一八年春の同所の写真である。灯油炉一二



図32 改造中の宮崎市葬祭センター（H8.2.20）

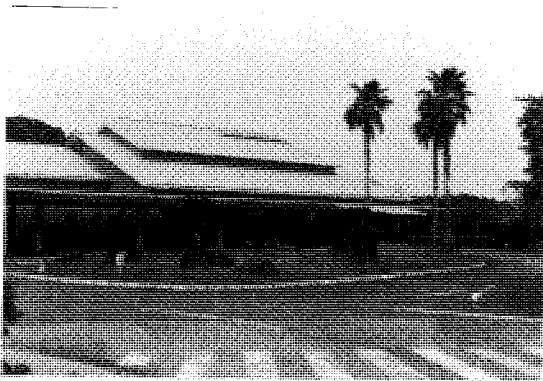


図33 宮崎市葬祭センター（H18.4.1）

基の火葬場である。火葬場の前のロータリーには、南国系の樹木がそびえ立つ。

鹿児島市 鹿児島県はかつて四国の高知県とともに、有数の火葬後進県であった。その県庁所在地である鹿児島市に正式の公営火葬場が登場したのは、昭和一三年できわめて遅い。

市街地は甲突川^{こうつき}を境にして、北部に宅地の約八割が集中し、鹿児島港を中心とした地域が商業の中心地であり、甲突川南部は人家が少ない水田地帯であった。

大正初期以降、甲突川南西部への市街地拡大が始まり、地域の拡大とともに、中心商業地も港の付近から、現在の天文館通りへと移行してきた。

第二次世界大戦後、特に昭和二〇年代後半から、地域の南西部への拡大がいちじるしく、甲突川北部と南部の人口が逆転する。西鹿島（現・鹿児島中央）駅が表玄関となったのは、そのような背景がある。

市街地の西南部への拡大に合わせて、鹿児島市で市営の本格的な火葬場が建設されている。現在の田上墓園の中の田上町一〇四三番地、いまは唐湊公園となっている一角に、昭和一三年五月、唐湊火葬場（供用廃止直前に重油炉八基）が建設された。

木造建築であったその唐湊火葬場のありし日の風姿が、『鹿児島市史 II』（鹿児島市、昭和四八年）の六五九ページ



図34 往時の唐湊火葬場（『鹿児島市史 II』より転載）

操業を続けることになる。

この唐湊火葬場のほかに、現在の南部斎場が位置する上福元町六九四五番地の一、いわゆる御所ヶ原台地の一角に、市営谷山火葬場があった。この火葬場の由来はややこしい。

昭和四二年四月二九日、鹿児島市はそれまでの旧鹿児島城下の諸町と、市域南部に所在した谷山市を合併している。

旧・谷山市は大正一三年九月一日に谷山町となり、昭和三三年一〇月一日に単独で市制施行して谷山市となっているが、その谷山市の時期の昭和三七年四月に、市営の谷山火葬場（供用廃止直前には重油炉二基）として開設されている。こ

じに掲載されている。それを転載したものが図34の写真である。

第二次世界大戦の末期、鹿児島市は七回にわたる空襲を受け、なかでも昭和二〇年六月一七日の大規模な空襲で、市街の中心部はほとんど焼失するが、唐湊火葬場は被災を免れ、戦後は四〇年余も

の旧・谷山市は進学関係で全国的に名を馳せたラ・サール高校（昭和二五年開校）の所在地としても知られている。

やがて谷山市は、昭和四二年四月二十九日、鹿児島市に合併される。この時点で、新しい鹿児島市は唐湊と谷山の二つの火葬場を併せ持つことになった。昭和も末期になると、両方とも施設の老朽化が進み、煙や臭いによる苦情など、さまざま面で都市化に対応できなくなっていた。

鹿児島市では昭和六〇年度から、新しい火葬場建設の用地買収などを進めてきたが、市の北域の小山田町こやまだの国道三号線沿いの、日置郡伊集院町（現・日置市）との境に、敷地約七

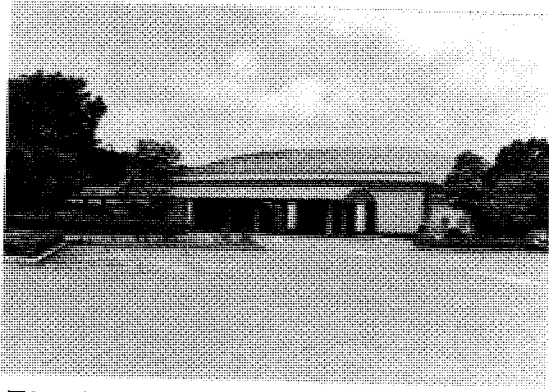


図35 鹿児島市立北部斎場 (H15.9.4)

ヘクタールを確保し、昭和六三年一月一日に鹿児島市立北部斎場として供用開始された。その前日、唐湊火葬場は閉鎖されていた。鉄筋コンクリート造、灯油炉一二基のこの新しい火葬場は、火葬棟・斎場棟・待合棟の三棟からなっている。図35の写真はその

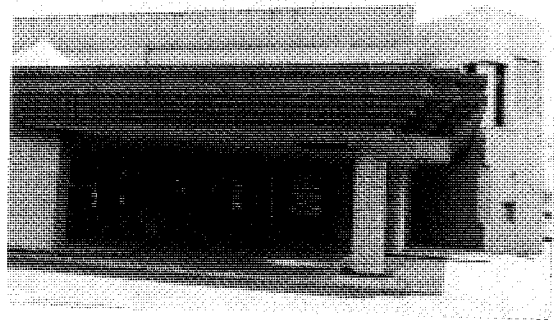


図36 鹿児島市立南部斎場 (H15.9.3)

近況である。ただ、市の中心地から一七キロメートル、片道三〇分以上かかるのが難点だと指摘する葬儀業者もいる。

さらに鹿児島市では、上福元町の谷山火葬場も敷地を約三倍に拡張、炉数も二基から灯油炉七基に増やし、南部斎場として平成四年二月に供用開始している。その車寄せ

の情景をとらえたものが図36の写真である。

結論

今後の課題と展望

九州における火葬場の流れのきわだった歴史性を点検した結果、地理意識が強いことを認めることができた。筆者たちのいう「地理意識」とは、意識の中にある地理的な区分のことである。

明治新政府は、国民国家建設の一環として、近代行政区分を創出した。いうまでもなくそれは民衆の地理意識の一つに

なつたと思われるが、それと引き換えにすぐさま前近代の国名、あるいは呼称などに基づいた地理意識が採用されなくなつたかという点、そうではなかつたと考える。近代行政区分が成立して間もない近代社会を生きた民衆は、この二つの地理意識とうまく接していたようである。

特に広域的な事務組合の火葬場の名称などから、この問題関心にアプローチすると、行政区分の変化がそれほど意識されていことが推察できる。例えば「嘉麻」「松浦」「西薩」などの例で、旧郡名などによつていものが多いことを知る。

これらは、火葬事務としての運営の単位などに影響されるのであろうが、分析の結果、第二次世界大戦をターニングポイントとして、「向西館」とか「天白園」とかの抽象名詞に変えられる。それまでは施設側が利用者にアイデンティティを伝えようとする施設名においては、前近代から使われていた言葉が用いられることが多かったが、この頃から、同じ施設において、近代行政区分に基ついた市町村名を冠称として、そのあとに「やすらぎ苑」などという、どこにでも使用できる抽象名詞を補完・利用して両極分界するのである。

前近代の国名や呼称に基ついた地理意識は、近代行政区分成立後長い年月を経ても、近代後成立の郡名とともに、火葬場名称にとつて有力な選択肢の一つであり続けた、と結論づ

けることができる。

また、九州地方における火葬場の立地場所は、長期的な時間スケールからみると、自然要因による地形発達過程としての台地や谷間と、短期的なスケールにおける人為的要因による地形改変過程地域との、両方に分かれていることが明確である。また、これらの両方が複合して現われている所での立地が明らかになつた。

また、近年の火葬場立地のための土地改変の中には、自然地形を活用しているものと、人工的につくられたものが混在していることも明確になつた。

したがって、火葬場としての土地利用が進んでいる地域の、地形を解析する際には、自然要因と人為的要因という時間スケール、質ともに異なる二つの要素による地形変化を区別したうえで、その火葬場の在る土地の履歴を明確にしておくことが必要である。

本州や四国各地にもみられるが、九州地方に特に多い、地形改変過程の上に立地している火葬場の、現在の地形に現われていない自然地形を把握することは、防災の観点からも、地震災害や水害・土砂災害の危険度を判定する際などに、きわめて重要である。

九州各地を歩いていて、新設の火葬場に多くみられるのは、背後の段丘面を切り取つてつくられている施設である。

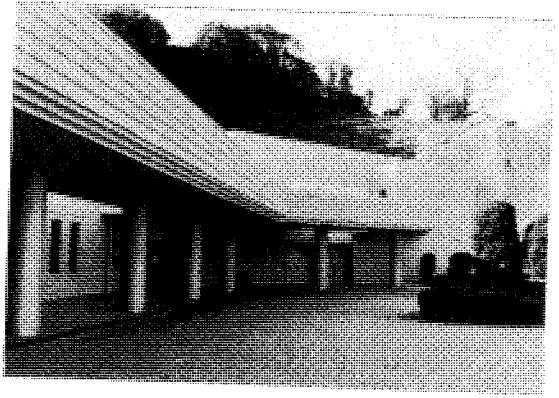


図37 白津葬祭場背後の段丘面の切り取り (H8.2.19)

もしたように切り取られ露出しているのに気づく。

さて、この論考の本論では、「転々と変わったトポス」

「戦前・戦後の連続性」「既成市街地からの離脱」などの類型に分けて、九州諸都市の火葬場を歴史的に論じた。このほかにも、「小規模な独立施設の維持」(行橋市・豊前市・伊万里市・島原市・水俣市・豊後高田市・日南市・指宿市・勝山町・椎田町・宮田町など)・「広域化による自助・共助の取り組み」(古賀市・前原市・別府市・臼杵市・津久見市・鹿屋市など)・「石炭産業で斜陽化した市町」(田川市・飯塚市・直方市・若宮市・荒尾市・鞍手町など)・「行政区再

また、アクセス道路にも、道路沿いに段丘崖の名残が散見できる場所が多い。例えば、大分県の臼杵市と津久見市で建てている白津葬祭場など、現在では分らないが、完成直後の平成八年に撮つてある図37の写真でみると、写真右手の背後の山が、ケーキカットで

編成の影響」(北九州市)といったような分類もでき、筆者たちはすでに資料調査や実地踏査も終了しているが、今回は紙幅の関係で割愛した。

なお、九州地方での各市町の自治体史での、火葬場の叙述には懸隔があり、その優劣の差はじつに大きいが、『川内市史』が最も良いと考えられる。

【謝辞】 小論作成のために協力いただいた、川合一郎(日本たばこ産業株式会社)・矢原正規(山口県庁)の両氏に、あつく御礼を申しあげる。

【追記】

火葬場の歴史をたどって歩いていると、本来「焼き場」とは、遺族関係以外の人が大勢集まる場所ではなかった、という事実がぶつかる。

火葬場関係の大量の情報を見て、聴いて、振り回されているうちに、「ライフスタイルの移行」という前提に気がついた。

それよりも、社会が大きく変わりつつある現在、火葬場もまた大きく変化していくだろうと、早くから予見されていた、浅香先生の評価が、印象的であった。

研究上では、何事によらず、概念規定にやかましい先生で

あるが、火葬場に対しては、中核概念と外的概念の仕分けが不明確と批判され、量的概念ばかりに関心が集まっていると指摘される。

学部生で東京に居た時期、甲府・松本をはじめ関東甲信越の火葬場を、先生と一緒に踏査した。

九州に戻ってからは、実家のある久留米を皮切りに、中津・水俣・八代・熊本・島原・長崎・大牟田・荒尾などの調査を、矢原先輩たちとお供した。JR九州におられた谷内田先輩が交通事故で亡くなられる二週間前に、福岡市西郊の北崎や周船寺の火葬場の跡地と一緒に踏査したことも忘れられない。

先生はいつも現場の近くで、地元の高齢者の人たちから聞き取りをされる姿勢が、真摯^{しんし}で謙虚であった。それから、その地の公立図書館での調べ物が念入りで、おかげさまで私も、コピーした地図類の繋ぎかたがうまくなった。

今行っておかなければ消えてしまう。現地はどうなっているだろう。文献を調べるだけでは見えてこないリアリティがあるのではないか……。焦燥^{しょうそう}にも似たお気持ち^{おきもち}が沸いて、矢も盾もたまらなくなつて先生は、九州まで来られるのにちがいない。

いつの年かの勤労感謝の日であった。明日東京へ帰られるという先生と、山の中腹の調査点で、バスの時間を逃してし

まったことがある。くだりの道で、西方に展開する不知火^{しらぬい}の海の風光は忘れがたい。岬、入り江。晩秋の風にきらめく波。点在する大小の島々……。

(井上 康時)



長崎市もみじ谷葬祭場で
(H18.7.30、矢原正規氏撮影)

あさか・かつすけ

日本大学理工学部建築学科教授
を経て、現在、本学会会長

いのうえ・やすとき

日本大学理工学部建築学科を
経て、現在、九州大学大学院人間
環境学府都市共生デザイン専攻
博士前期過程

儀礼文化フォーラム

—— 永遠の旅立ち ——

下村 侃
鳥井松治郎

河野 太通氏（姫路龍門寺住職）

黒住 宗晴氏（黒住教教主）

川崎 明德氏（川崎学園理事長）

高橋 秀氏（倉敷芸術科学大学教授）

長門 勇氏（俳優）

井上峰一氏（株式会社いのうえ代表取締役社長）

下村 侃氏（エヴァモア儀礼文化研究所名誉所長）

○司会

．．．宗晴第六代教主さま、学校法人川崎学園、川崎明徳理事長さま、倉敷芸術科学大学、高橋秀教授さま、わが郷土、倉敷が生んだ俳優、長門勇さま、そして株式会社いのうえ代表取締役社長、井上峰一。本日コーディネーターを務めますのは、儀礼文化研究所名誉所長、下村侃。以上の先生方で、本日フォーラムを開催させていただきます。皆さん方には、いまま一度、温かい歓迎の拍手でお迎えいただければと思っております。

ここ数年、葬送の儀礼、儀式が大きく変わっております。イ

ベント化されたり、セレモニー化されたり、そしてまた逆に、都会では亡くなられた方を直接火葬場に運ぶ直葬という形態が、今や四十パーセントという現実でございます。本日は原点に戻りまして、葬送の儀礼、儀式について、先生方にお話をしただけだと存じます。よろしく願ひいたします。

○下村 ただいま所長からご紹介いただきました、コーディネーターを務めます、下村でございます。どうも初めまして。きょうは皆さま方には、雨の中を大変お足元が悪いのに、こんなにたくさんご出席くださりまして、主催者側の一人といたしまして非常にうれしく思っております。短い時間ではございますが、テーマに則しまして始めたいと思います。

「儀礼文化フォーラム——永遠の旅立ち——」でございますが、最初にパネリストの方々からご一名ずつ、このテーマ「永遠の旅立ち」の永遠というのはいったいどういうことなのかということについて、お話をうかがいたいと思っております。パネリストの皆さん、どうぞよろしく願ひいたします。

最初に、元花園大学学長、現龍門寺（姫路市網干区）住職でございます、河野太通老師から一言お願い申し上げます。

○河野 「永遠の旅立ち」という題が挙げられています、永遠ということをお考えと、まず私たちは、この肉体を失ったそのときからの時間が「永遠の旅立ち」の始まりであると、常識的には思うわけでありませう。

しかし実は「永遠の旅立ち」というのは、私がこの命をいただいたときから、すでに始まっているというのが本当のことです。それはいつからかと言うならば、私がいかにこの世に肉体を持って現れた命、それは具体的には父、母であります。しかしその父、母も、いただいた命であります。それをずっとさかのぼりますと、原子になるのか元素になるのか、さらにずっとさかのぼりますと、まさに無に帰するというようなところまでさかのぼります。

現代の科学では学説によつて相当開きがあるようであります。人間らしい形を持つて、この地球上に出現したのが三、四百万年前だと言われますね。しかしそれは人間らしい、この肉体を持ったときからのことであつて、それより前のことを思いませんと、まさに永遠の過去と言わざるを得ない。そのときから「永遠の旅立ち」は始まっているのであつて、この私が今、いただいている命というのは、そのときからのつながりであるわけです。

ですから、この肉体を失ったときに、この世の儀礼を行つて「永遠の旅立ち」を始めるという、そんなものではないという認識が今、この社会では非常に薄れております。外国に人を送つて、しばしお目にかかることができなくなつたというので、お別れ会をしますが、現代では、この肉体を終えたときのお別れが「永遠の旅立ち」だという感覚を持つているのであり

ます。

けれども、永遠というのはまさに永遠であつて、過去の未来から現在、現在からまた永遠の未来へ向かつての命の続き、これが永遠ということであると、私は思つております。

○下村 ありがとうございます。宗教学、あるいは人間学のお立場から永遠という言葉の意味合いを、深い意味合いの過去、現在、未来へと続く中での人と人との出会い、あるいは別れといった点についてもお話しくださいました。

続きまして、第六代黒住教教主であらせられます黒住宗晴先生に、先ほどわたしが申し上げました「永遠の旅路」、特に永遠というものについて、神道のお立場からひとつ、いろいろお話し願いたいと思います。

○黒住 まず冒頭に、井上社長をはじめ、お世話いただいた方に、高いところからではございますが、お礼を申し上げたいと思います。先月、わたしの母が満九十四歳と五カ月余りで、まさに安らかに昇天いたしました。その葬儀、告別式に、社長自ら汗を流してくださつたわけでありますが、かねて皆さま方とのご縁の中で感じておりましたことを、如実に目の当たりにいたしました。それは、社長をはじめ皆さま方が、わたしと社長のきずながあるとは申せ、お一人お一人の若い方に至るまで本当に真心を込めて、まさに誠意と熱意があつたこと。これは世に言う遺族であるわれわれにとりましては大変な救いであり、

感動でありました。

それにしましても九十四歳と五カ月余りを生き切りましたら、寂しさはありますけれども、悲しみというのではないものです。われわれ子ども四人が、「おれたちは冷血動物かな」というような自責の念に駆られておりましたが、「いや、誰も彼もそうだとすることは、やはり生き切ったからだろう。おふくろ、お見事」ということに尽きたわけであります。今は、ご葬儀の一切をお世話になった、皆さんの誠意もさることながら、それをさせたのも母ではなかったかと、そういう思いがいたしております。

いわば、いかに死ぬかというのは、いかに生きるかということであつて、それを親として如実に子どものわれわれに教えてくれたことは、あらためて親に対する感謝と、また同時に敬服の思いが強まったことでありました。

これは聞きかじりではありますが、ある女性の文化人類学者が、永遠という時間の感覚、生命の連続ということについて、自ら足を運んで、いろいろな民族を調査したそうであります。

そうしますと、文明の発達に比例するように時間感覚が短くなる。いわば永遠性が欠けてくる。そういう社会になると社会が不安定になって、いわば平和が乱されてくる。反対に、例えば子どものない人は、養子を迎えてまでして家を大切にすることを。お家一大事で、まさにお家を第一にするのは何のためかと

いうと、それはいずれました、そこに自分が生まれ変わってくるためにも、家という器をしつかりさせなくてはならないと。そういう信仰といえますか、そういう生き方を大切にしてきた民族、集落は、現実の生活も非常に安定してピースフルだったと。

そういうことを聞きまして、わたしはその方に、「ひよつとして先生、これは日本のことじゃないんですか」と言ったら、にやつとして、イエスともノーとも言いませんでした。

日本人が大切にしてきた、この「儀礼」という言葉には「かた」がある。「かた」を伝承し「かた」に命が込められて「かたち」になる。へ理屈のようですが、その「ち」は命の「ち」であり、生命的なそういう働きを、日本語では「ち」という言葉で表したようですね。知恵の「ち」でもありますし、土地の「ち」でもありますし、お乳の「ち」でもあります。ともあれその「ち」が込められる。それはつまるところは、人にあつては真心、誠意であり、熱意であると思えます。

そういう意味におきまして、わが母の葬儀に示していただいた誠意、熱意、まさに「ち」の込められた、井上社長以下のこの心をもつて、そうしたご葬儀の場はもとより、日常生活で今の時代に欠けたものを埋めていく、そのぐらいの心意気をもつて取り組んでいただきたいという思いでございます。

○下村 ありがとうございます。黒住先生に宗教的な観点か

ら亡きお母さまへの思いを語っていただいて、わたしどもはよく理解することができました。実はわたしも、母親が昨年九十三歳で亡くなってから三回忌を迎えております。そういうことで、わたしも母への思いに切なるものが今、非常に感じられたわけでございます。

続きまして、川崎学園理事長の川崎明德先生。川崎学園は岡山県で最も私学として医療の道を志す方々を教育されている総合学園です。今、申し上げました永遠、時の流れといったものと人間存在というものについて、お話を聞かせ願えばありがたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○川崎 「永遠の旅立ち」をさせたらいけない、要するに、させないようにするのがわたしどもの仕事といえますか、役目でございますので、きょうは、いのうえファミリー会の儀礼文化フォーラムにパネリストとして出席させていただきました、少々場違いかもしれませんが。

わたしも実は十年前の六月二日に、先代の理事長、川崎祐宣が亡くなりました。ちょうど九十二歳で亡くなりました、早いもので、もう十年たちました。十年前に大変立派なお別れの会を井上社長にいただきました。わたしはそのときに、井上さんはすごいプロデューサーだなと。本当に素晴らしい演出で、立派なお別れの会をしていただきました。皆さんも本当にありがとうございました。

最近、死の概念が非常に変わってまいりました。昔は、呼吸がなくなると、心臓が止まって、目の反射がなくなると、お医者さんが聴診器、あるいは脈をとって「ご臨終です」と。今は人工呼吸器ができて、呼吸が止まっても機械で息をさせることができますから、結局、意識がなくても心臓が動いているという状態で、お別れのタイミングが非常に難しい世の中です。ですから、「永遠の旅立ち」にスタートする時期が自然でなくなったというか、非常に人工的な要因がそこに入ってきております。

われわれ医療の世界は、一日でも一週間でも、一カ月でも半年でも、少しでも長生きしてもらいたいということで努力をしまいにまいりました。「人間の命は地球より重い」ということがあって一生懸命やっておりましたが、最近はこちらと考え方とも変わってきて、あまり無理な延命をするのはどうかと。ところが、一度人工呼吸器をつないでしまうと、なかなかそれを外すことができない。そこで、われわれ医療関係者も、今度は自然にその方の心臓が止まるまで面倒をみるという、大変つらい仕事があります。

家族の方も、初めは「少しでも長生きしてもらいたい」「永遠の旅立ちを遅らせてほしい」という考えですが、数カ月、あるいは半年、一年がたちますと、「もうこういうことはやめてほしい」というような気持ちを持たれるような状態で、われわれ

れも非常に悩んでおります。今は安楽死の問題、尊厳死の問題も出ておりますが、これは、われわれが非常に悩んでいることだと思います。

それから最近では移植、脳死の問題も非常に重要なことです。宗教上の問題も含めて、人間が本当に脳死を死と認めていいのかどうかと。わたしはもともと外科医でございますが、心臓が動いていても人間としては死んでいるのだという状態ではないと、人間が人間の臓器を使って、より長生きをするという移植は非常に難しい問題です。

今は特に移植外科は非常に技術が進んで、免疫に対する抑制剤もいいのができましたから、技術的には移植できるわけですが、脳死の状態というのは心臓が動いているわけです。心臓が動いている人にメスを入れて、心臓、あるいは肝臓、肺臓を取り出して移植し、移植された人が今度は新しい命をもらって生きるということに対して、脳死の判定など、われわれ医療の世界は非常に悩みを持っております。

ですから、旅立ちをできるだけ遅らせる立場からしたら、この「永遠の旅立ち」は大変難しいことだなと。また後で話をさせていただきます。ありがとうございます。

○下村 ありがとうございます。今、川崎先生から、特に医療現場のお立場から儀礼文化への思いを語っていただきました。会場の皆さまもそれぞれ、ご家族あるいはご友人、その他

の方で入院されたり、ご自宅で療養されたりしている方もいらっしゃると思います。「がんばらない」という言葉もありますが、どうかひとつあきらめないで、治療のために頑張ってくださいと、わたしは思います。

続きまして、わたしのお隣にお座りの高橋秀先生に「永遠の旅立ち」というテーマ、永遠についてお話し願いたいと思います。先生はプログラムにもご紹介がありましたように、昭和三十六年に「月の道」で第五回安井賞（安井曾太郎記念会）を受賞された後、昭和三十八年から四十年間ほどイタリアのローマに留学されまして、絵の世界を歩んでこられたわけでございます。

現在は玉島の沙美（倉敷市）にあるご自宅を開放されたり、若い人の絵画の勉強のために賞を設けて教育されたりということとで頑張っておられます。ひとつよろしく願います。

○高橋 わたしは、最初は絵描きから出発したのですが、版画もやり、モニュメントもやりという手広いことで、ただ画家とこのものでは収まらなくて、今や美術作家を自称しております。

二十歳前から、とにかく本物の美術家になりたいんだ、本物の絵描きになりたいんだという、これは言ってみれば業のようなものでしょうか。そういうことで五十数年、その道だけに過ごしてきたのです。そういう身から見まして、きょうの儀礼文化フォーラムには、おそらく皆さんも場違いなやつだと思ひ

でしょうが、わたし自身もそう思っております。

この「永遠の旅立ち」というテーマですが、先ほどから申しているように、わたしは五十数年来、絵画制作、芸術を通じて、常に永遠を求め続けてきたわけです。現在もなお、その永遠を求め、永遠にあこがれ、永遠を見たくて、永遠を具現化したくて、毎日アトリエで仕事をしたり、いろいろなことに携わって生きております。そのわたしが求め続けてきた永遠が、ただ旅立ちの永遠であってほしくないという自分の願いと、それが旅立ちにつながるのであれば、もう今まで何度も旅立ちをしまつているのかなという思いもあるのです。

美術家として、永遠というのは、生命も自然もすべてを含めた宇宙の循環の中にあると考えております。その中で、ではどういう形で何をつかめば永遠たり得るのか、永遠をつかみ得られるのかということ、形を求め、色を求め、方法を考え、なお社会に向かつてどのように働き掛ければ、自分の存在が、この永遠の循環法則に準じられるのだろうかというような、まったくつかみどころのない、夢みたいなことで日々を過ごしております。

そういうことからして、この「永遠の旅立ち」をどう解釈しているのか、今ちよつとたじろいでいるところですが、人間の本質、人間の魂の本質というのは、この永遠の宇宙の循環の中に共存しているものだ。ですから、生命もすべて含み込んで

いる、その宇宙というのは何なんだというふうに、途方もない大きな、つかみどころもない広がりの中に己を投げ込んでいく、そういう中には、いさかきも戦争も何もないだろうという夢みたいなことを考えて暮らしております。

この儀礼文化フォーラムに、わたしがどのようにかかわればいいのか、また次の設問でお話ししたいと思います。

○下村 ありがとうございます。今、高橋先生のお話をお聞きして感じたのですが、非常に哲学的なお立場から、宇宙と人間というものについて、大いなる宇宙の中のちつばけな存在である人間は、しかしその宇宙の中で循環しながら、お互いに協調しながら、そういう形で生きていかなければならないというような意味合いのことをおっしゃったように思います。また後ほどかがわせていただきますが、ちよつとわたしの感想も付け加えて要約させていただきました。

これはまた後で申し上げますが、「永遠の旅路」といいますか、旅というのはつまり人と人との出会い、別れを物語っているのだらうと、わたしは思います。人間は、過去、現在、未来へと、時の流れとともに瞬間、瞬間を生きていく存在だと思っておりますが、井上峰一社長、時の流れと人間存在、人間尊厳というようなところから、ひとつお話し願いたいと思います。

○井上 二十年前にこの儀礼文化研究所を設立いたしました、河野太通老大師、黒住教教主、そして川崎明徳理事長、さらに

高橋秀先生、長門勇先生に顧問になっていただいているわけがありますけれども、二十年前を振り返りまして、顧問に就任していただいていたのがよかったです、きょうは実感しています。

同時に、顧問の皆さん方に一堂に集まっていたことはめったにないものですから、実は私はこのフォーラムを一般公開したかったです。ただ、いかんせん時間がありませんでした。きょうも、もうあまり時間がないですね。本当に素晴らしい四人のパネリストの先生方がいらつしゃいますので、特に四人の方々にお話を聞きたいと思っております。きょうは私と長門先生が聞き役をさせていただきます。

われわれのこの仕事というのは、まさに人間存在、しかも人間の尊厳に一番近い仕事ですが、そうした中で、生と死は一体であります。ちょうど今から三十三年前に、私の師匠でございます、きょうお見えの河野太通老大師の下で、「不二妙道（ふにみょうどう）の価値観」ということを教えられました。生と死は一体なのだ、そして社会と私は一体なのだ。その価値観を持った上で、この人生を歩いて行けということを、よく言われました。

私はこの仕事に従事して、先ほどは黒住教教主、そして川崎理事長にも、お母さま、さらには川崎祐宣名誉理事長のことで、いろいろと感謝のお言葉をいただきました。しかし私はそれ以上に、きょうは四人の方をお迎えてきて、大変幸せでござ

います。どうか、もう時間がございませぬので、四人の方を中心にひとつよろしく願います。

○下村 最後になって誠に恐縮ですが、長門勇先生。長門先生は、きょうもボランティア大使として儀礼文化に関する実践をなされてから、この席に来られたとうかがいました。社会的なボランティア活動をされているということに対して、わたしは心から敬意を表しております。長門先生は俳優さんのお立場で日常のボランティア活動をされているのですが、これからもやはりずっと続けてされるわけですね。

○長門 やったらいけないようなことを言わないでください（笑）。永遠というのは無理かもしれませんが。

きょうのテーマとちよつとかけ離れるかもしれませんが、わたしは、ことしの三月は浅草大勝館で芝居をやつてまいりました。梅田コマ劇場であれ、新宿コマ劇場であれ、道頓堀の中座とか、名古屋の御園座とか、いろいろな劇場に出させてもらいましたが、わずか一月です。本当のお芝居というのは二十五日間興行をやるのですが、その間、昼夜二回公演だったり、一回公演だったりしまして、全部で五十回ぐらいいやりますね。

「素晴らしいな」と言ってくださるお客さんもおられますが、ただ義理で来たようなお客さんもおられます。何年やっています、その二十五日間の中で、朝起きて自分の体調が良く、本当に芝居を見たい、歌を聞きたい人と、舞台でやってい

る人が、ぴちっと一体になってできるときは、一回あるかないかです。

だから、永遠というテーマとは少し違いますが、年とともに渋みを加え、年輪を重ねるのもいいのでしょうか、人生で一番脂の乗り切ったとき、一番華やかなときに、ころっと逝くのが、わたしは一番いいと思っっているのです。川崎先生、よろしくお願いします。あんまり長生きさせないように(笑)。

○下村 ありがとうございます。また後ほど、長門先生の立場から、儀礼文化について、思いを語っていただきたいと思えます。

残りの時間は、ひとつキャッチボールをしていただきたいと思えます。例えば井上社長と長門先生、あるいは井上社長と川崎先生、あるいは河野太通先生と黒住先生といったような。特に太通老師と黒住先生は、太通老師には仏教のお立場からいろいろお話を聞きますが、黒住先生には神道のお立場からいろいろお話を聞きます。わたしは、神道の目指すものも、仏教の目指すものも、結局、求めるところは一如の精神ではないかと思えます。その辺からでもひとつお話を聞かせていただきたいと思えます。

黒住教の教祖の宗忠先生は「神人一如」、神も人間も結局一体だとおっしゃって立教されたわけですが、その辺のところをお話し願いたいのですが。

○黒住 高橋先生のお話を横で聞いていて、今おっしゃったようなことを、わたしも思ったのですが、人にあるの大事は心の真実(まこと)であり、それは大御神の御心(みこころ)だと。いわば天地宇宙の本来(ほんねん)だというようなことを申しております。

実は先ほど控室で面白く話していたのですが、先年、岡山の県北で、ごく近しい年寄りが亡くなりました。いわゆる通夜からお参りしたわけですが、お寺のご住職が来られるのが遅れて、六時からというのが六時半過ぎにようやくおいでになったんですね。その間は皆、遺体を前にして、ひたすらおいでになるのを待っている。それも、わたしにとってはいい時間でした。

ご住職がお経を上げられ始めて、ほんの二、三分で終わりますして、「どうぞ皆さん、お食事に」と。皆ほっとしたのが、わたし自身の中にもあつたし、そういう気が流れました。

離れで食事をしながら、ふと気になって座敷のほうをのぞいてみましたら、ご住職が亡くなった方の顔に覆いかぶさるようにして手を合わせて、涙をぼたぼたこぼしながら拜んでおられるわけです。口が動いていますから、お経を上げられていたのだと思えます。

わたしは奥さんをはじめ子どもたちを呼んで「見てみる。これが本場の葬儀だ」と。それは大変感動的な一瞬でしたし、

次々入れ代わり立ち代わり、見るといふよりもお参りする思いで、廊下のほうから、ご住職と亡くなった方の姿を拝み見ておりました。

翌日がいわゆる葬儀になったわけですが、非常にすかつとした、しかもそういう心のこもったご葬儀ができました。今おっしゃったように、神道だ、仏教だと申しませけれども、同じ人間のかかわる、一番大事は、先ほど申しました、本気かどうかであって、「かた」で終わらずに「ち」がこもっているか、誠意があるか、どれだけ熱意があるかです。

そのためには、まるでわが血肉を分けた親子きょうだいの思いで、病む人には接し、また亡くなった方には、いかに接することができるか。わたしどもはいつもテストを受けているような、そんな思いがしたことであります。

○下村 ありがとうございます。

もうひとつ、これは太通老師にお尋ねしたいのですが、先ほど高橋先生が、宇宙の循環の中での人間の営み、あるいは生き方ということをおっしゃいました。ちよつと思ひ出しました。が、インドの古代の哲学で、ウパニシャッド哲学というのがありますね。宇宙と人間は一体であるということを読いた哲学だったと、わたしは記憶しているのですが、それとよく似たお考えを高橋先生はお持ちのようです。太通老師、そのあたりはどのようにお考えでしょうか。

○河野 おっしゃるとおり、人間の命と、この大宇宙の命は一つのものであるということですね。まさにそのとおりでありまして、仏教も、自分自身は有限、限りのあるものであって、その反対側に永遠のものがあると解釈するのになしに、自分もやはり永遠の中のひとこまである。宇宙の命というものが永遠で、自分は有限であるというのではなくて、宇宙と私とは同じ永遠の命を生きるものだと考えるのが仏教でもあります。

私は先年、黒住教の教主さんから本を何冊かちょうだいして読みましたが、私には大変受け取りやすく、「なるほど、こういう受け取り方もあるんだな」と。一つの、この世界の真実、宇宙の真実というものを受け取る、受け取り方、表現の仕方が違っているのであって、同じ真実を語っていると思うのであります。

仏教では、この世界を見る三つの真実の見方がありますが、その一つが、皆さん方もご存じの「諸行は無常である」ということですね。この無常ということが、実は永遠です。永遠の變化の連続、これが無常であり、永遠ということなんです。

われわれも無常の命を生きている。無常の命を生きているということが、永遠を生きているということなのであって、それが一番具体的なのは、呼吸をしているということですね。吐く息、吸う息、これを連続してやっているのが永遠の命を生きているということであって、吐きっぱなしでも死んでしまいます

し、吸いつばなしでも死んでしまう。吐かなければ生きられないし、吸わなければ生きられない。吐いたり吸ったりすることによって生きていくということだ。

これはそのまま大宇宙の生命といえますか、宇宙の息吹を息吹かせていただいているという、そういう感動、ぬくもり、ありがたさをいただいでいくということが「永遠の旅立ち」ということだと私は思っております。

ですから、死んでいくということも「永遠の旅立ち」ですが、実は、私は、毎日死んでいるのだと。一日死んだということとは、一日生かさせていただいたということになるのだと実感しております。

○下村 ありがとうございます。

○黒住 わたしは、ご老師が神戸にいらっしゃったときに、お寺で座禅を直接にご指導いただきました。皆さん、今、ご老師のお話で、吐いて吸うと言われたでしょう。二ワトリが先か卵が先か。普通、どちらが先かといったら、吸うことだと言う人が多いのですが、吐くから吸えるわけですね。座禅では、その吐き方、吸い方を教えていただきました。最近では呼吸法が健康にいいということで、テレビでも雑誌でも盛んに取り上げられています。体の健康もさることながら、心の健康、さらには本体の、いわば魂の健康のためにも、正しい呼吸の大事をあらためて教えていただきました。

そうしてみますと、赤ちゃんが生まれるときは「おぎゃあ」と吐いて生まれますね。亡くなるときは、息を引き取るんですね。だから、ご老師がおっしゃるように、今もお互い、吐いて吸って、吐いて吸って、「おぎゃあ」と生まれて、息を引き取って、「おぎゃあ」と生まれて、息を引き取る、それを繰り返しているのだと、あらためて思いました。その節は、ありがとうございました。

○下村 そうですね。いいお話でした。

○長門 余計な聞き役ですが、テーマが難しすぎて、ちよつと分かりにくいのでないでしょうか。わたしは、生きていくことも大事ですが、社会で人さまの役に立つ、良心のある子どもを育てて、元気なうちに世の中をよくすることを一つか二つ残して、それでころつと死ぬのが一番いいのではないかと思っております。調子のいいときにエネルギーを発散させるしかないかと。単純なことしか言いませんが、いかがなものでしょうか。

これは永遠のテーマですが、儀礼文化というのは、子どもたちに対しての社会の教育でしょうか。そういうことではないのでしょうか。ちよつと社長からお話を聞かせていただきたいと思うのですが。

○井上 太通老師、それから黒住教教主が今おっしゃったことは、実はそれほど難しくない話なんです。非常にシンプルなことなんです。それを本当に思い、実践し、具現化しているか

どうかです。そこには、いろいろな立場、さらにはいろいろな思い、また宗教があるわけですが、私が老大師に教えられたことは、先ほども言いましたように、「不二一如」の価値観ということです。これはやはり一体ということ。社会と私は一体なんだと。しかしそこには責任があるんですよ。同時に、お互いに思いやる気持ち、これを大事にしなさいということをや常々言われました。私は、「永遠の旅立ち」という、この大きなテーマは、そういう思いで考えています。

先ほど老大師が言われましたが、一日生きるということ、一日死んでいくということ。だからこそ、そういう思いでしっかりと地に足をつけてやっているかという、このことだと思っただけ。老大師、いかがでしょうか。一番ばんぐらの弟子であります。

○河野 井上社長は、学生時代は大変な暴れん坊でして、「これは、どうなるのかな」と心配しておりました。戦争中は特高（特別高等警察）に狙われる、戦後は学生運動のさなかで、これもまた警察に追われるというようなこともありまして、大変心配しましたが、しかし私は見直しました。ほんとにすごいリーダーシップです。

学生時分には応援団を組織して、団長になって大暴れしていましたが、今や社会の応援団になって、皆さん方の大切な人間の最期を迎える儀式の親玉とでも言いましょうか。本当によく

細かいところに気を付けて、命の尊厳ということに思いをいたしてくれていることを大変感心して眺めているのです。どうぞひとつ、これからもしっかりと社会のために貢献してくれることを期待しております。

○井上 お話が全然違うのですが（笑）。ぜひ老師のお立場からもう一段階、黒住教主と川崎先生と。

○黒住 長門さんのお話を聞いていて、中身もさることながら、やはり一緒だと思っただけです。下腹から声が出ていますもの。口先でちよつと言ったのでは、やはり見る人の感動を呼ばないでしょう。

○長門 わたしも芸歴は長いのですが、俳優だからといって、先生方もそうでしょうが、古ければいいというものではありません。骨董（こつとう）品ではないんですからね。

○黒住 テレビ時代劇「三匹の侍」のときは格好よかったですね。でも、あのとき死んでいたら、今はありませんよ。

○長門 あのころは「三匹の侍」が勝った、映画「七人の侍」が勝ったと、そういう白黒つけるような時代ではありましたが、時代、時代によって、いい作品もずいぶん出ておりました。最近、これはという作品がありません。テレビ、映画そのものも全部そうですが、なぜ薄っぺらになったのかな。人情はなくなったし、心のない人間が非常に多いですね。

○下村 ありがとうございます。

川崎先生、先ほどは永遠について、医療のお立場からいろいろお話をうかがったわけですが、それ以外に何かお話を。

○川崎 今の子どもや若い人は、死に直面するとか、死に出会うことが非常に少なくなってきました。というのは、平均寿命が男性で七十七―七十八歳、女性は八十七―八十九歳です。ですから非常に高齢社会ですね。しかも核家族化で皆、同居していませんから、そういう祭事、法事とか神事とかに子どもがなかなか出ていない。それから、病気で亡くなる人の八十一―九十パーセントは病院で亡くなりますね。そうすると、若い時代、特に子どもが死というものに対して直面していません。生と死とか、どういうときに亡くなっていくんだとか。

これは非常に残念なことだと思います。やはりもう少し親子、あるいは三世代が一緒に住んで、人間が老いる、病気になる、亡くなるということに直面していくこと、祭事をきちんとしていくことが大切ですね。昔は、「神事・法事は孫の正月」というので、みんな集まって、ごちそうが食べられるので、子どもは喜んだわけですね。ところが最近では、そういう祭事的时候は、「子どもは来なくていい」「子どもは勉強しなさい」というので集まる人も少ない。これでは、世の中のそういう文化が上手に伝わっていかないのではないのでしょうか。

先ほど黒住教教主が言われたように、葬儀自体も、本当の意味で、亡くなられた方を葬ったものが非常に少なくなっている。

る。日本人の宗教観もあるのでしょうが、もう少し子どもものときから、死に対する教育、あるいはそういう祭事に対する教育をやっていかないと、日本のこういう文化が非常に寂しくなってくるのではないかという気がいたします。

○下村 わたしも同感であります。

○井上 今、言われたように、まさにコミュニティーの崩壊、さらには宗教の形骸（けいがい）化という現在なんですね。そうした中で、老大師、黒住教教主、どうでしょうか。ちよつとそのあたりを。

○河野 私が住んでおりますのは姫路市網干区というところですが、先日、小学校の先生に出会いましたので、文句を言ったことが一つあるのです。それは、昨年の秋の彼岸に、地区の小学校の運動会をやったんですね。彼岸の中日ですから、私の寺では彼岸法要をやっておりますし、お墓参りの方もあるわけです。各お寺さんでも、何らかのお勤めをなさるか、あるいは門徒さんのところにお参りに行っているわけです。

しかし、その日を選んで小学校は運動会をやっておる。今のことでありますから、保護者の方が子どもたちの運動会を応援しに学校へ行ってしまうわけですね。そんなことをやっていいのいかと。学校がどうして体育の日に運動会をやらずに、彼岸の中日に運動会をやるのかと。学校は、地方文化といいますが、国民の風俗、良き習慣というものを、子どもたちに伝達す

る意味においても、彼岸の中日に運動会をやるということは避けてもらいたい。そういう抗議を、私は申し入れたのであります。

これは一事が万事であります。小学校の子どもたちの、たぶん六十一パーセントは何らかの家族のお葬式に出合っているとありますが、そのときには学校を休んで、お葬式に出席するわけでしょう。そのお葬式は、何らかの宗教的儀礼によつて故人を、おじいさん、おばあさんを送っているわけですね。

ところが、その宗教というものを学校で教えない。そして、彼岸の中日のようなときに運動会をやつて、お寺にももちろん行きませんし、お墓参りにも行かない。お墓参りは、おじいさん、おばあさんの仕事、お寺参りも、おじいさん、おばあさんの仕事。子どもは学習塾に行くか、部活動を一生懸命やっているから、「おまえたちは来んでもいい」ということであります。

先ほど川崎先生が言われたように、子どもたちは法事には来なくてもいい、お葬式もいいのだという思いを、大人自身がすでに持っている。そしてそれが社会的な一つの雰囲気、当たり前のごとくなっていると。こういう社会の雰囲気、大人自身の考えを変えていかなければいけない。そうしないと日本の伝統的な良俗といえますか、そういった風俗が失われていく。かの戦前から戦後を通して今日に至るまで、大人たちはそういうこ

とを考えて温め、伝達していくということをおろそかにしてきたことを反省しなければならぬと私は思っているところであります。

○黒住 本当に、われわれも大人の立場で、そのことを一番痛感しています。先年、わたしの友人の、ある私立の幼稚園で新築をいたしました。ところが私立の幼稚園ですから、やはり経営がちゃんとできないといけないということ、経営状態のつとつた、いわば計算された幼稚園ができました。

ところが、それを見た理事長であるオーナーは「これはいかん」と、経済的にはものすごく損失でしたが、全部つくり直しました。なぜかという、床はPタイル（プラスチック系の床材）で、テーブルはデコラ（メラミン樹脂を用いた化粧板）、湯飲みは子どもが落としても割れないプラスチックで、壁は落書きをしてもすぐふけるものでした。

それらを全部直して、床は無垢（むく）の板にしました。テーブルも木にしました。湯飲みもプラスチックをやめて、落としたり割れる焼き物にしました。壁は土壁です。いたずらをしてたら壊れる、汚れたら取れない、いわば本物に触れさせる。これが教育の一番の土台だということで、あまりにも無機質なものに囲まれた子どもたちを、本物に触れさせることに鋭意努力するようにいたしました。

わたしはそれを聞いて本当に感動しました。確かに損得は大

切でしょうが、あまりにもすべてのところで経済効率が言われすぎて、何が良くて、何が悪いか、物を盗ったらいけないというような「悪」もさることながら、子どもが育っていく上において、その心がいかに生きた心になるか、人生を生きられるかということに、食べ物も含めて大人がもつともつと知恵を働かせて配慮し、よほど賢く生きなかつたら難しい時代になりました。

その延長線上に、先ほどわたしも初めて知ったのですが、直葬という名の下に、ご葬儀をしない方が四十パーセントもいます。まったく無機質な世の中になってきたものです。これは同時に、われわれ宗教者に対する大変な挑戦であり、また葬儀霊祭を営む企業にとっても大変な挑戦だと思っています。だからこういうフォーラムをなされたのだろうと思います。

つまるところは、いかに本物に接するか。そこには生きていくか、死んでいるかが大切であって、生きていけばこそ感動がある。死んでいたら感動がない。そこにつながるのではないかという思いを今、ご老師の話を聞きながらもあらためて思いました。

○下村 ありがとうございます。これはまた、わたしの考え方になりますけれども、結局、直葬が増えつつあるのは、いわゆる「団塊の世代」と言われる世代ですね。この方々が、来年はたくさん現役から離れます。わたしは別に団塊の世代を

代表して言うわけではないのですが、この方々は、とにかく一生懸命働いてきたと。家族のためにも、世の中のためにも、会社のためにも働いてきたと。

でも、より良く生きる、より楽しく生きるという、現代社会の一つの感覚に合わせて、「葬儀は亡くなった人のものなんだから、そんなにお金をたくさん使わなくていい」「面倒くさいことは葬儀のベテランに任せて簡単に済ませたい」「早く死というものから離れて楽しく生きたい」というような考え方が、どうも直葬が増えている裏面にはあるように思います。

ですから黒住先生がおっしゃったように、子どもの教育もさることながら、やはり成人教育というか社会教育に、今度は大きな責任がかかってくると思います。それなら、その社会教育を誰がやるかということになるのですが、文科省がやるわけはありません。やはりその道、その道の専門家が早くその芽に気付いて、それに立ち向かっていかなければならないと、わたしは考えていますが、高橋先生はどのようにお考えでしょうか。

○高橋 教育問題になると大変大きな社会問題ですが、この儀礼文化のまず初めは、あいさつではないでしょうか。今の子どもたちは、あいさつができません。朝出会って、「こんにちは」「おはよう」ということが、まず言えません。なぜ親たちがそこまでのしつけをしていないのか。もっとも「おはよ

う」「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」と、お互いが言葉を掛け合うことが、儀礼文化の第一歩だと思えます。

文科省がどうの、行政がどうの、政府がどうのということではなくて、皆さん方が、ご夫婦であったら、同じ部屋で寝ていても、朝、目が覚めて起きたら、お互いに「おはよう」と声を掛け合う。子どもたちとも朝、顔を合わせたら「おはよう」。あまり広大な難しい議論を試してみてもどうしようもない。とにかく皆さん、まずあしたの朝から、「おはよう」と声を掛けることから始めていただきたいと思えます。それが一番大きな儀礼文化の第一歩だと思えます。

○黒住 運動不足になるといけないということで、わたしはよく歩くのですが、子どもだけでなしに、あいさつをしない大人が多いですね。これはわたしの不徳のいたすところかもしれません。わたくしは追いつけて行って「おはようございます」と言いたくなるのですが、さすがにそれはちよつと嫌だからやりません。社会全体に、そんな感じがありますね。

○河野 おっしゃるとおりです。先ほど、子どもがあいさつを知らないとおっしゃったけれども、大人も知りません。きょうは姫路から離れているから言ってもいいかもしれませんが、神戸にいたところは毎朝、裏山にウォーキングに行っていました。そうすると、全然知らない人と行き違つても、「おはようござ

います」と気持ちのいいあいさつを交わしていたのです。

ところが所変わつて今のところに行ってまいりましたら、あいさつがありません。確かにわたしの顔を知らないのかもしれませんが。寺の後ろにお墓があるんですね。これは、わたしが今いる寺の檀家（だんか）さんではないけれども、まことによくお墓参りをやる習慣のあるところで、しょっちゅうお墓参りに来るのです。盛んにやる場所は、ひよつとすると朝昼晩おいでになるんじゃないかと思うぐらい。私はもう少しラフな格好ですが、一見してすぐこの住職だと分かるような格好をして境内を歩いていますが、私と顔を合わせても、会釈もありません。けさもそうでした。

それで近ごろは私のほうから「おはようございます」、あるいは「こんにちは」「お墓参りですか」「ご苦労さまです」と声を掛けることにしております。そうしますと声を掛けられた方は、「何を言われたのかな」という不審な顔をして、こつちを見ておられるんです。私はしつこいですね（笑）。「いや、あなたにあいさつをしているんです」と言います。

あるとき私は境内で、最近植えたツバキの樹木を見ておりました。そうしたら、どなたかが後ろを通つた気配がするので、ふつと見たら、境内を自転車で墓地のほうへ行かれたのです。私が白衣（びやくえ）を着て立っているのは見たはずなのに、声も掛けずに行つてしまわれた。私はそれに気が付くとすぐ後

を追い掛けて行って、「おはようございます」と言いました。

すると、まるでげん顔、ちよつと腹立たしいような顔をして私のほうを向くと、「この間ここに、墓地の工事に墓石屋が来ただろう」と言う。「来ていましたな」と言ったら、「わしのところの墓地が、ほこりをかぶった」「あんな石屋は辞めさせろ」と、大変なおしかりを受けました。

私はその方に、「それは、わたしが住職になる前のことだけれども、すまなかつた」「しかし朝来たら、ちよつとあいさつぐらゐは交わそうよ」と言いましたが、向こうはもう腹を立てたついでですから、ずつとむすつとしてお帰りになりました。

子どもさんが本当にあいさつをしないということは確かに分かります。しかし、その子どもさんを育てている親がそもそもあいさつをしなくなつてしまつた。皆さん方も外国においてになつてお気付きだと思ひますが、ヨーロッパやアメリカに行きましたら、道で全然知らない人と目が合つても、にこつとしませんよ。けさも私は、姫路の駅で婦人から、にこつとされて、いい気持ちになつて、やつてまいりました。

外国では、ホテルに泊まつて、ホテルの何階かの廊下で擦れ違つても、顔を合わせたら、にこつとする。日本人の場合は、エレベーターの中で、お互いにむすつとしております。何かご機嫌の悪いことでもあるのかと思ふような顔ですが、アメリカやヨーロッパの人の場合は、にこつとして、本当に気持ちが

いすね。日本人、中国人、韓国人というのは、だいたい無愛想で、むすつとしています。どうしてでしょうか。

やはり子どもものときからの、われわれ親の教育が至らなかつたのだらうと思ひます。どうか子どもものときから、「人の顔を見て目が合つたら、にこつとしよう」と。「なんかこいつ変なやつだな」と思われるかもしれませんが、やはり、にこつとあいさつをする。「しんどかつたら会釈だけでも」と、私は気が付いたときには、周囲の者に言っております。皆さん方も、そういうことをひとつお願いします。

確かに、これはおっしゃるように儀礼文化です。中国の『礼記』（らいき）という本には、「礼は往來を尊ぶ」とあります。あちらからお見舞いに来てもらつたら、何かのときには、今度は、こちらからそのうちに出掛けて行くと。そういう行つたり来たりが礼儀の始まりだという意味です。

私は、肉体の行つたり来りだけではなしに、言葉の往來も大変大切だと思つておりますので、そんなことで、しよつちゅう腹を立てておりますが、自らも「こんにちは」と言つて、知らん顔をされたら「ちよつと、あなたに言つたんですよ」と、しつこく実践しているようなことでもあります。

○下村 ありがとうございます。まだまだいろいろお話ししたいことはございますが、また第二回の儀礼文化フォーラムをやる計画でございますので、よろしくお願ひしたいと思ひま

す。きょうは本当にありがとうございました。

また会場にご出席の皆さま方にも大変お疲れでございました。何かきょうは得るところがございましたでしょうか。パネリストの方々には、いろいろなお立場から大変貴重なお話を語っていただきました。

松尾芭蕉が『奥の細道』という旅行記を書いておられますが、冒頭の言葉は、皆さん、ご存じだと思います。「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」と。これがひとつ「永遠の旅立ち」を物語る言葉だと思っております。永遠の旅人とは、やはり人と人との出会いであると。そしてまた、その出会いには必ず別れがやってくる。それが過去、現在、未来へとつながる一つの道なんだということが、芭蕉が『奥の細道』の冒頭で語っていることだと思います。

井上社長が言われました人間の尊厳、つまり喜びとか悲しみは、一瞬、一瞬のときを精いっぱい生きる人間の生き方、生きざまを教えてくださいなと思います。

これをもちまして「儀礼文化フォーラム——永遠の旅路——」を終了させていただきます。ありがとうございました。

○司会　ありがとうございます。禅の心、神の心、そして人間尊厳、最後には教育のお話まで、本当にさまざまなお話を聞

かせていただきました。本日のお話を心の糧といたしまして、われわれ一層の精進をしたいと存じております。

パネリストの先生方には、ご健康には本当に留意されまして、ますますのご活躍、ご発展を心からお祈りをさせていただきます。ありがとうございました。

(終了)

【主催】株式会社いのうえ・いのうえファミリー会・エヴァモア儀礼文化研究所

【録音反訳】平成一八年六月二九日

「あとに残された人へ」

谷 莊吉

最近、「1000の風」と言う唄の「CD」が、幾つかの葬儀場で、葬儀の時のBGMとして、流されていると言う風評を聞きました。

既にご存知の会員の方も多いと思いますが、今まで此の「詩」に余り関心を抱かれ無かった方に、若干の説明をしたいと思えます。

米国で50年ほど前に、ある新聞記事として紹介され一世を風靡しましたが、作者不明のまま今日に至っているようです。日本における紹介の経緯は色々あるようですが、私の手元にある資料としては、一九九五年六月一六日初版（ポケット・オラクル・シリーズ）南風椎訳と言う小冊子です。書名は「あとに残された人へ・・・1000の風」です。

原文の題名は「A THOUSAND WINDS」とあります。

十二行の短い詩ですが、とても美しい英語で書かれていて、文脈の流れによって、死者の思い（イマジネーション）がふつ

ふつと伝わって参ります。

冒頭の一行は「私のお墓の前で、泣かないで下さい」で始まります。

そして、「私はこのお墓の中に、眠ってはいけません」と続きます。

最終行は「私はこのお墓にはいません。私は死んではいません」と結ばれております。

結局死後、風になり、雪になり、太陽の光になり、雨になり、鳥になり、星になり、私は、自然の中に生きています、と言う趣旨です。

この詩の素晴らしさは、「死別の悲しみを和らげる詩情」ではないかと思えます。

そうした評価からすれば、葬儀場のBGMで、この唄のCDが流されているのは、自然の成り行きかも知れません。

誤解を受けるのを覚悟して、敢えて、この唄のCDが、葬儀の厳粛な「別れの儀式」の場において、BGMとして流されている現状を想起した時に、「疑問」を言いたいと思いたくなるのです。その理由を述べたいと思えます。

葬送儀礼の視点から考えると、私には、些かこの詩の情緒は、「死別の悲しみ」を倍加するのではないかと言う危惧を感じるので。

私の悪い癖で、愚論を呈しますが、お墓の前で「泣かないで」と言う「願い」は、死者の一方的な願いに過ぎないのでは

ないかと考えるのです。この世に「残された人」にとつては、「死別の悲しみに、しみじみと泣く、あるいは、大声を張り上げて泣き叫ぶ」ことの意味を噛みしめたいのです。

屁理屈の第二は、「私は死んでいません」と言う宣言に対して「文句」を言いたいのです。情緒として理解出来ず。然しです！

自然科学なる「学問」を持ち出す迄もなく、「生きとし生けるもの」は、この世においては、「必ず死ぬ」運命にありま。幾ら、「死んでいません」と言つたとしても、現実には、死に果てているのです。「死んでいない」と言う願望は理解出来ず。然し、生前の生活理念として、自然現象の厳しさを「甘く解釈」している人生観が、この詩には、表現されているのではないかと思う訳です。

「死」と言う厳しい「自然の掟」を無視したような「詩情」と言えましょう。

前述のように、詩情のロマンとしては、とても心に滲みる詩なのです。

ですが、ですがなのです、同じことを書きますが、このCDが「流行歌」並に、葬儀場のBGMに流されていることに、疑問を感じない世間の風潮に対して、疑問を投げかけておりません。

時代の流れ、流行、風潮、今時の市民感情、そうした現状に「追いついていけない私」が可笑しいでしょう。

今回のこの「随筆」の趣旨は、私の持論「お墓の必要性」をまた、しつこく「強調」したいからです。色々深い研究をしようが、そのデータに基づいて主張が出来れば「論文」になるので、そのゆとりも手間ヒマもないので、「愚見」と言うことに終止することになりますが、とにかく「消えるお墓」を寂しく感じるので。

単に感情的に「寂しい」と言うだけでなく、お墓の存在意義をここでもう一度考え直さないと、「日本民族の歴史」が、次世に伝承されなくなるのではないかとさえ心配するのです。

「墓は要らない」と言う意見に対する、「反論」を展開したいのですが、それは、そう簡単ではないような気が致します。新進気鋭の若い学者（葬送文化学会会員）さん方の中で、此の人間社会の最終の「店じまい」の証としての、「墓の存在意義」を、民族文化の継承、歴史、ご先祖様の「生活の有り様」など、「郷土文化」の拠点として研究して下さる方の輩出を期待しております。

今、私の書棚に、一冊の大事な本があります。

西村崑山著：「よい墓の建て方」（墓づくりの神秘）リヨン社刊（一九八一年）です。私は、平成一四年から一六年まで、兵庫県兵庫区の里山町にある「高齢者ケアセンターひょうご」と言う高齢者施設の管理医師をしておりました。この著書の趣旨である、「神戸市無縁供養塔」の移転にまつわる経緯によれば、その移転先が、私が奉職した里山町の北側の隣の山だった

のです。一度訪ねたいと思いながら実現出来ませんでした。そのことが、脳裏を離れませんでした。今回この著書を再読して、つくづく、「お墓の重要」を再認識しました。

最近、敬愛し尊敬申し上げております会友の「小谷みどり」さんのご高著・岩波書店刊行・「変わるお葬式、消えるお墓」と言うご著書を謹呈して頂きました。

大変に感動致しました。市場調査と言う基礎データに基づいた観点からの提言です。

過日、信州「木島平」の墓地に、小松病院（今私が奉職している病院）の故小松良夫先代理事長の納骨式に参列して来ました。地元の「小松家」のご先祖のお墓に、墓誌が書いてあり、そこには、小松家のご先祖様の多くの方々が生まれ、生きて、死んだ、「足跡」が残っております。

隣近所の墓石の幾つかは、風化して、多分、無縁仏になっているのではないかと思われました。それでも、郷里と言う土地に埋められている「お骨」は、この土地に生まれて死んだと言う足跡なのだと感じました。

日本国中の何処にも、郷土には、野山、山間、海辺など、田圃の真ん中にも、その村落の家々の歴史が刻まれている訳です。大げさな言い方をすれば、日本民族の命が、お墓によって、継承されているとも言えましょう。

最近、汽車での長旅をする機会が少なくなりましたが、車窓から見られる「墓地」の光景は、私の生死観を刺激して、そ

のたびに、日本民族としての、個々の家々（過去の家系制度）の「お墓の存在意義」について考えさせられています。民族存続の歴史について殆ど何の知識も持ち合わせていないにもかかわらず、今此処に存在して「生きてある」われ（私）とは、一体「何者」なのかと言う「問い」に思考を巡らすことになるのです。

ご先祖、子孫と言う家の関係が、社会構成上の観点から見ると、現在大きく様変わりしてきているのでしょうか。かつて、結婚により、子孫を遺すと言う意味では、結婚は、「個人と個人」の関係だけでなく、「家（家系）と家（家系）」との婚姻関係によって成立していたことの、歴史的変遷は、色々な面で、現代社会における重要課題ではないのでしょうか。最近、結婚したがる「若者」が増えていると言われている社会現象は、何を物語るのでしょうか。国家存亡の危機だけの問題に留まらないように思います。

墓石の形状の歴史の意味。「何々家の墓」と言う文言、墓碑に刻まれた「何々家の家系の日時」の意味。考えだすと果てもなく関心事が広がります。

谷家の墓は、四国・愛媛県・八幡浜市の海望園と言う山肌の南斜面にある大法寺（臨済宗妙心寺派）（五十嵐興道住職）に有ります。私は、谷家としては、一九代目になるそうです。このお寺に「過去帳」が残っていて、先祖代々の位牌が納められているのです。父が他界したので、墓石を改めました。年に一

度くらいしか墓参出来ませんが、お花を添え、線香を供し、両手を合わせると、無念の祈りと共に、今此処に、ご先祖様の墓石の前に、自分の足で立つていられることへの感謝が自然と湧いて参ります。悲しみの涙ではなく、歴史の重みへの感謝の気持ちの方が表出します。（墓は要らない）と言う感情は持ち得ません。（影の声として）そりゃあお前、ご先祖様の永代供養の墓があるからそんな偉そうなこと言えるだろうが、新しく「墓作りする」のは「大変だぞー」と言われそうです。

二十歳頃（医学部学生時代）に、東京・自由が丘の「今井館」で、当時東京大学総長の矢内原忠雄先生の聖書講議を毎週日曜日に受けていたことを、お墓のことで思い出しました。ある時、旧約聖書の「創世記」の話がありました。今でもその強烈な印象が忘れられません。それは、人類存続の原点であります。第五章一節に「これはアダムの系図の書である」と記されており、その時の先生の講話の趣旨は次のようでした。三節以下に、アダムは子供を産んで死んだとある。その子供は、また、子供を産んで死んだ。誰々が生まれて死んだ。そしてまた、誰々が生まれて死んだと言う系図の名前の羅列である。味もそっけもない文章のように思える。然し、最終的に、二八節に「ノア」（旧約聖書における重要人物）の誕生の記事がある。「主の呪いを受けた大地で働く我々の手の苦勞を、この子は慰めてくれるであろう」と言う意味で、「ノア（慰め）」と名付けられたと記されている。アダムからノアに至る系図の中

に出て来る大勢の人物は「名もない平凡な人々」に過ぎない。この歴史的記載の意味は、「人が生まれて、生きて、死ぬ」と言う最も単純・明快・普遍的な事柄の説明なのだ。個人としては、「名もない存在」かも知れないが、この世に生まれて、生きて、死んだと言う歴史的「事実」は、それなりの重要な価値があるのだ。詳細は覚えておりませんが、とても心に残るお話でした。

同じことを強調しますが、「民族の歴史」（日本民族の墓の歴史）の重要性について、もう一度、若き研究者に、その「掘り起こし」を切にお願いしたいのです。

死んで「消えて仕舞いたい」、生きた「足跡は遺したくない」と言う気持ちは、ロマンとしては、なるほど了解出来ますが、自分が、自分がと言う「個人存在」だけを主張する風潮に対して、いささか苦言を呈したいのです。そのもう一つの理由は、死んでからのことよりも、「生まれて来たことの必然・ご先祖様の生きざま・家系の歴史・命の継承」に敬意を評する必要があると思うのです。

駄弁を書きましたが、再度、我が学会として、「お墓の重要性」についての「論議」を啓発（歴史的学問研究をベースに）して頂ければ幸いです。

カトリック教会を巡る五島列島の旅

福田 充

はじめに

九州・大分県在住のある老婦は、長崎県の西の海上に浮かぶ五島列島について、文字通り「西方浄土の島」と呼んでいた。実際、東京からの距離は約一五〇〇kmになり、韓国・济州島にほど近く、東シナ海を渡れば中国大陸に届く位置にある。まさに日本列島の西の果てだ。かつては、縄文時代の遺跡が残り、遣唐使船の最終寄港地でもあった歴史もある。

以前、島で知り合った漁師は、夏場は沿岸のサザエ・アワビの素潜り漁を専らにしていた。しかし、七、八年前から環境変化や資源の取り過ぎの影響か、海底の海草類が死に絶えてしまふ「磯焼け」現象のため、サザエ・アワビの漁獲高は激減してしまった。そのため、今は日韓国境線近くまで、アマダイやイトヨリダイの延縄漁を仕掛けに遠征しているという。

カトリック信者が集中する長崎県・五島列島

この夏、この五島列島に個人で旅行してきた。一〇数年前に

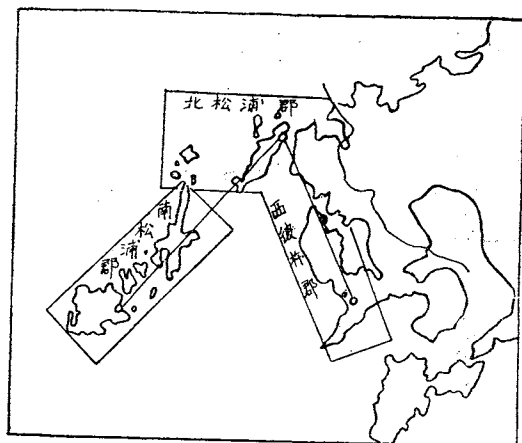
はじめて訪れてから、もう五回ほどの訪問になる。

五島列島には、現在でも約五〇か所のカトリック教会が散在しており、青い海と島々の姿、そしてさまざまな建築形態の異なる教会堂の建物の姿が美しい。はじめて訪れた際、海沿いに張り付くように形成された集落の風景は、防波堤と港、火の見櫓、そして高台の本州ではたいがいが神社か寺院の建物が建つ位置に、マリア像や十字架の塔をもつ教会が佇んでおり、エキゾチックな景観が印象的であった。

この姿は、いまま大きな変化をみせておらず、実際、地元の人学者などが「長崎の教会を世界遺産にしよう」という活動も行っており、かつてのキリシタン文化も含めたカトリックの歴史的遺産の保存・活用のための活動もみられる。

昭和三十三年（一九五八年）に行われた「五島列島総合学術調査報告書」において、長崎大学の菱谷武平教授は、当時のカトリックと教会の状況を次のように報告している。

「全国には約二五万人のカトリック信者があり、その三割に当る七万五〇〇〇人の信者が本県（長崎県）に居住している」とし、東京都の三万五〇〇〇人を遙かにしのぎ全国一である。長崎県内でも信者の分布は、県北の北松浦地区を軸として一つは西南へ延びる五つの島と付近の小島に連なる南松浦郡の一線、一つは東南へ延びる西彼杵半島から野母半島へ連なる西彼杵郡の一線（図1）のエリアに集中しているという。



図(一) カトリック部落の分布

同様にカトリック教会の分布についても、当時全国に約三三〇か所のうち、長崎司教区下に約八〇か所配置されていた。そのうち、北松浦郡二四、西彼杵郡一二、南松浦郡三三と、合計六九か所はこの三地区に集中しており、「その隔絶性と孤立性」が顕著であると指摘している。すなわち、日本のカトリック教会は九州・長崎、なかでも離島である五島列島に集中して見られるのだ。

では、現代の状況はどのようなのだろうか。今回の旅で、現地の方々にいただいた資料に二〇〇三年一月末現在の「長崎大司教区現勢統計表」があった。長崎県の人口約一五〇万人のうち、

カトリック信者数は六万七千二百八十八人（内訳Ⅱ信者数六万六千五百〇人、司祭他一一七八人）であり、二〇〇二年より七一人減少している。教会のある小教区は七十二、準小教区一、集会所一、巡回教会五九と、教会数は一二〇か所にのぼっており、教会数は前述の一九五〇年代に比べ増加しているものの、信者数は減少傾向にある。

表1 五島列島のカトリック信徒数

地区名	小教区名	信徒数	世帯数
上五島地区	青砂ヶ浦	1,292	404
	丸尾	499	129
	仲知	394	151
	大曾	839	205
	曾根	660	204
	鯛之浦	911	200
	浜串	504	206
	桐	570	210
	真手之浦	431	125
	土井之浦	449	91
小計		6,549	1,925
下五島地区	福江	1,234	448
	浜脇	129	42
	浦頭	570	183
	奈留	445	135
	水ノ浦	663	178
	三井楽	387	169
	貝津	176	68
	井持浦	251	63
小計		3,855	1,286
合計		10,404	3,211

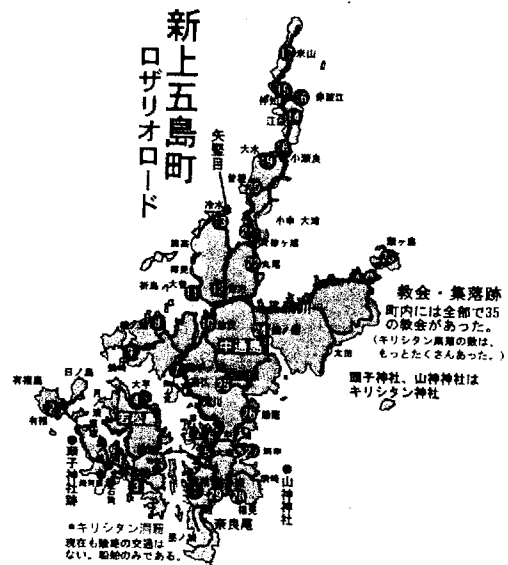
ちなみに、全国のカトリック信者数は四五万〇一二五人（カトリック教会情報ハンドブック二〇〇六、二〇〇五年一月）とされているので、日本全体のカトリック比率は〇・三五％であるが、長崎県では四・四％の比率を占め、その集中度の高さがわかる。なかでも五島列島には一八小教区があり、信者数は

一万四〇四人にのぼっている。特に上五島地区は信者数六五四九人と、人口二万七〇〇〇人の対比では、約二四％の割合になる。

カトリックゆえ、世帯当たりの家族数も多いが、近年は次第に高齢化して、子供たちは島を出て働きに行つたまま戻らず、お年寄りだけの世帯も多くなつてきているようである。漁業が主要な産業で、少しずつの農業、観光客もけつして多いとはいえない新上五島町の人口も、近年は減少傾向にある。

五島列島にはあちこちの在に教会があり、早朝には鐘の音が目を覚まさせてくれ、日曜の朝には村々からミサのために老若が集まつてくる光景が美しい。ただ、それだけカトリック人口が多いとはいへ、実際に島を訪れてみると、教会建築は目立つものの日常生活では徐々にカトリック文化が薄らいでいつていくようだ。

五島観光連盟が制作したリーフレット「祈りの島を旅する」(平成一四年六月)によると、五島列島には五〇か所の教会が現存する(図2)。これらのなかには、宗教施設として日常的に集会やミサが行われており、そのために新築・改修されたものもあるが、多くは歴史的にも建築的にも価値のある教会が多い。重要文化財に指定されている施設もあり、本格的な保存・維持活動の必要性もある。



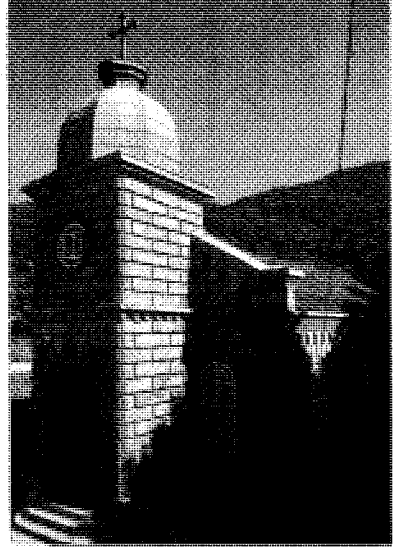
バラエティ豊かなカトリック教会群

今回訪れたなかで、特徴的なそのいくつかの教会を紹介したい。

● 頭ヶ島教会 (大正八年竣工、設計・施工鉄川与助、一三九m)

一九一〇年(明治四三年)に着工し、一一年余りの歳月を費やして完成した、現存する石造りの教会としては、西日本唯一の教会である。

上五島町のある中通島の東に位置する頭ヶ島は、今は橋で結



1910年に着工し完成までに10年間で費やした頭ヶ島教会

ばれている。今春閉鎖された上五島空港に通じる道から、つづら折りの道を下ると、白浜と呼ばれる小さな浜と港の防波堤、そして目を凝らすとかすかに教会の十字架と、その向こうに墓地らしき区画が見えてくる。小さな浜に接して、戸数一〇戸ほどの集落が形成されており、集落のいちばん高いところに石造りの教会が見えてくる。

頭ヶ島教会は、平成一三年に国指定重要文化財（建造物）となつている。全国的にも珍しい石造りで、創建時の原型が保存されて、しかも現在でも教会堂として使用されている希有の例であるという。ちなみに屋内の天井は「持ち上げ天井」といい、島の名物であるツバキの花をあしらった模様美しい。

この集落の一面には、白い浜に面して十字架を冠した墓石が並ぶカトリック墓地がある。夏の時期には海水浴場となつてい

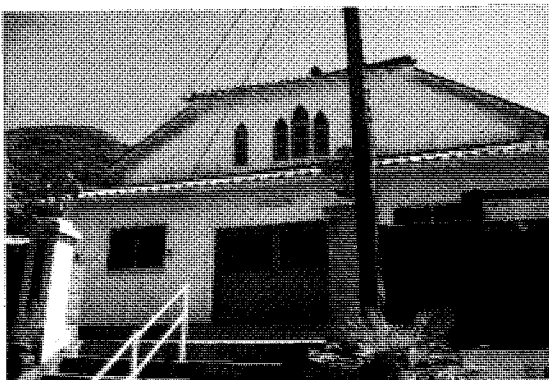


頭ヶ島教会のそばにあるカトリック墓地

る白浜に接して、青い海と白い浜、そして十字をいただいた墓石、これだけで五島を象徴する美しい光景を演出している。

● 江袋教会（明治一五年設立、一九五^m）

上五島町（旧新魚目町）江袋部落の集落は、細長い中通島の中心部から車で一時間以上かかる。曲がりくねった山道から、漁港のある集落に入ると、東シナ海に向かい西方浄土を見つめ



現存する最古の木造の江袋教会

るように²行む小さな教会が江袋教会である。

現在でも機能しているとともに、木造教会として、現存する最古の建物として知られている。屋内は、リブ・ヴォールト形式と呼ばれるアーチ型の天井で、創建当時のステンドグラスが一部使われている。



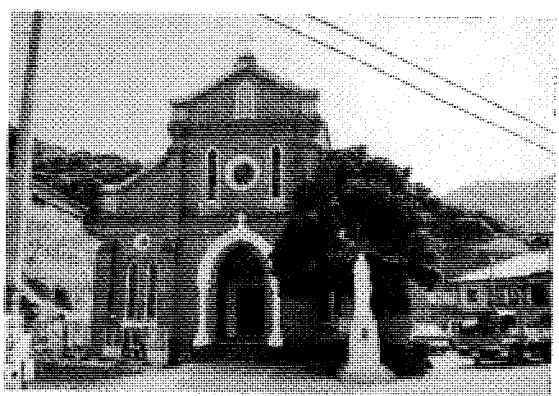
小さな集落ながら現役で使われている

●青砂が浦教会（明治四三年献堂式、設計・施工鉄川与助）

上五島町青砂が浦郷（旧新魚目町）に位置し、五島の景観を最も象徴している赤レンガ造りの美しい教会である。

十数年前にはじめてこの地を訪れたときの印象は、今でも目に残っている。静かな奈摩湾から少しのぼった高台にあり、正

面の十字架と「天主堂」の文字が夕日に照らされて、とても感動的だった。頭ヶ島教会とともに、国の重要文化財に指定されている。



赤レンガ造りが美しい青砂ヶ浦教会

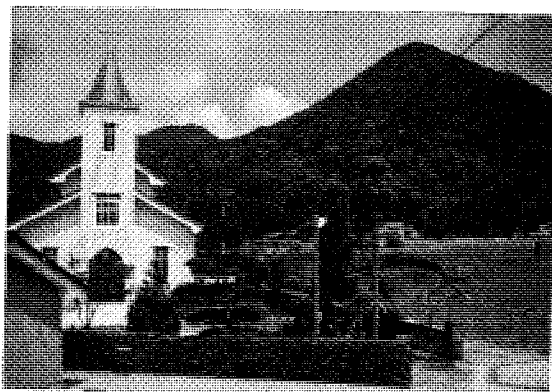


1910年完成。当時の神父が外国から原稿を取り寄せて設計施工した。

●中ノ浦教会（大正一四年（一九二五年）建立）

中通島の中部、深く入り組んだ浦の最もえぐれた位置に、清楚な白い教会が中ノ浦教会である。数ある五島列島のなかでも、「いちばん美しい教会をつくる」という地元民の意気込みで建設されたという。

海辺のわずかな平地に立てられた中ノ浦教会は、海とともに暮らす五島の人々の白い小さな漁船とともに、風景を形作っている。白い木造の建物と青い海、山の緑のコントラストが美しい。



静かな入り江にたたずむ中ノ浦教会



天井の模様は、島の花ツバキをあしらっている

有福島の有福教会にて

上五島の中通島から若松大橋を渡ると若松島に入る。市町村合併前の旧若松町である。人口約二二〇〇人、カトリック人口が多く、隠れキリシタンの伝説が残る島である。

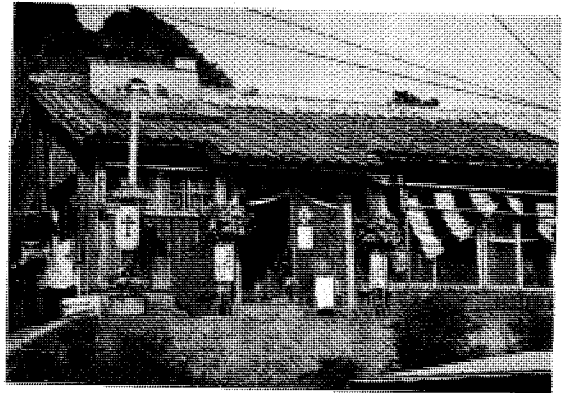
若松島の西側には、漁生浦島、有福島、日島などの小島が連なっており、橋や防波堤で結ばれているので、車で最西端の日島まで渡ることができる。

日島の曲地区には、日島曲石塔群という遺跡が見事である。中世に、福井県高浜で制作された石塔（五輪塔など）が日本海の海上ルートを伝わって、杵岐・対馬、五島列島などで建塔されている例が多いという。それらの中でも、日島曲石塔群が集中度が高く、代表的な遺跡となっている。日島には野生のシカが生息しており、集落の住民と共生している。現在では「若松ディアパーク」として、観察路なども整備されるようになった。

今回の旅の途中、日島の手前に位置する有福島の有福教会（昭和二年建立、その後改修）を訪ねた。有福島は約九〇世帯、一八四人しか人口がないが、カトリック信者が多い。

教会にのぼる階段の途中から、教会近くの民家に白黒の鯨幕がかかっていた光景を目にした。どうやらお葬式のようなのである。玄関先には、大きな提灯が二つかかり、手洗いスタンドと

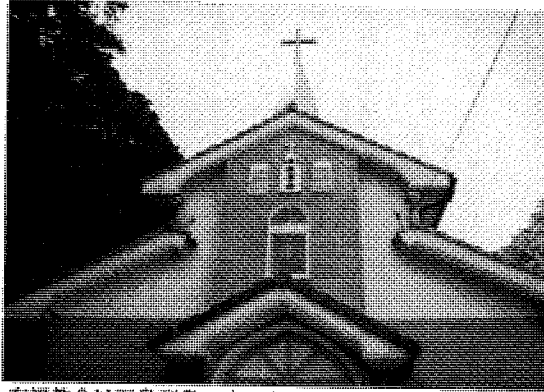
なぜか「忌中札」がかかっている。遠目から目を凝らしてみると、「忌」と大きく黒書されている。



白黒の鯨幕と十字架をあしらった提灯、「忌」札も見える

その家は、教会の右側に連なる集落の一番手前にあり、提灯に記された黒い十字架模様からすると、カトリックのようである。しかし、カトリックなのに忌中札とはそれだけ土着しているということなのか。

教会の階段で遊んでいた男の子にたずねてみたところ、当家のおじいちゃんが亡くなったようだ。子供たちは、しばらく外で遊んでいなさいと言われたらしく、「今うちで、神父さんとお祈りの打ち合わせをしている」と返事が返ってきた。有福教会は、桐小教区の管轄にあ



有福教会は五島列島の中でも小さな有福島にある

り、巡回教会となっている。

五島列島、カトリック信者の葬儀に関して

五島におけるカトリック信者の葬儀に関して、後日中通島の役所関係者や地元の葬儀社から断片的に聞き取りをした。

一〇年ほど前から、カトリック教区本部から火葬を前提とした葬儀の仕方の指示があり、神父が火葬場まで立ち会い、最後のお祈りを捧げるようになった。この点で、葬儀の流れはいまでは仏式の僧侶と同様になっているという。火葬場は、市町村合併前の各町村にそれぞれ整備されており、上五島北部の旧魚目町域では半島東側の集落のほとんどない大浦地区の火葬場を使用する。同火葬場は、古くからあったものを数年前に建て替え・新装した。

また、かつては土葬をしていたため、墓地の敷地がなくなっており、集落内にあるこの地区の墓地には共同納骨堂が建設され、遺骨を納めるようになったという。

ちなみに、上五島地区の葬儀業者は、老舗の専門葬儀社一社に加え、農協が葬祭センターを設けており、そして新興勢力として七年ほど前に結婚写真などを扱っている業者が「全国この会」の支部を設立している。葬祭ホールは、下五島の福江

島で三年ほど前に一か所開業しているが、上五島にはまだない。ほとんどが自宅で葬儀を行い、教会や寺院はお祈りの場とするようである。

しかし、上五島の中心部の埋立て地には五年ほど前に、大規模なショッピングゾーンができており、スーパーマーケットやホームセンター、カラオケ店など連なるゾーンが形成されており、島の暮らしも急激に近代化しているようである。また、今回の訪問で目立ったのは、目新しい特別養護老人ホームの建物である。島のあちこちに、新築の大規模な老人介護施設がつぎつぎと建設されている光景は、ここ数年の大きな変化であった。

こうしてみると、数年後には葬祭会館・葬祭ホールが建設されて、本州と同じように葬儀場で葬儀が行われるようになると思われる。

■参考文献

「五島列島総合学術調査報告書」(一)、長崎大学離島総合学術調査団、昭和三三年度

「カトリック教会情報ハンドブック二〇〇六」、カトリック中央協議会、二〇〇五年一月

三沢博昭写真真集「大いなる遺産 長崎の教会」三沢博
昭・川上英人著、智書房、二〇〇〇年八月

「祈りの島を旅する」五島列島教会巡り、五島観光連盟
発行、二〇〇二年

「長崎の歴史散歩」長崎県高等学校教育研究会地歴公民
部歴史分科会編著、二〇〇五年六月、山川出版社

イザヤ53章と日本文学

——十字架の死と「もののあはれ」の文学における死——

上村 敏文

わたしたちは羊の群れ

道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。

そのわたしたちの罪すべて

主は彼に負わせられた。

イザヤ書53・6

苦役を課せられて、かがみ込み

彼は口を開かなかつた。

屠り場に引かれる小羊のように

彼は口を開かなかつた。

イザヤ書53・7

捉えられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。

彼の時代の誰が思いを巡らしたであろうか

わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり

命ある者の地から断たれたことを。

イザヤ書53・8

イザヤ書53章は、ベルンハルト・ドゥームが抽出したいわゆる「苦難の僕」^{*1}の第四歌として名高い。イザヤ書が旧約聖書のヒマラヤ、そしてこの53章はエヴェレストにも匹敵する峻峰であり、これについて論じ、新たな「神学」を見出す事はこの論の目的とする所ではない。むしろ「千古の謎をもって今もなおユダヤ人とキリスト者に迫り、全人類に問いかけている」^{*2}とは中沢治樹氏の言であるが、その全人類に問いかける普遍的書として、日本という文脈においてどのような靈感を得る事が可能であるかについて一つの視点を提供したい。

着目すべき点が多いが、ここでは「死」という点に着目をして取り上げてみる。前提として苦難の僕とは誰であるかについては諸説あるが、ここではマルティン・ルターのイザヤ書講義に従い、また「神の痛み」の神学で著名な北森嘉蔵氏が、「イエス・キリストにおける神の痛みによつて始めて真理の成就を見た」^{*4}としているように、キリストについて語られたものであるという事を前提に論を展開する。^{*5}

比較宗教的に論ずるにあたり、いわゆる世界の三大宗教の中で教祖が、人類が考案した計の中でも、最も残酷である十字架で刑死しているという「事件」は、注目に値する。キリスト教

においては、特にこの十字架が有する意味は重大であり、信仰の中核的な位置を占めている事は言うまでもない。日本にキリスト教が根付かない一つの理由として、このあまりにも残酷な死という事が、なかなか受け入れ難い所かもしれない。無論、逆説的ではあるが、この贖罪的死において、明治以降の土族階級の一部は共感を覚えて入信したとも言えなくはない。本論においては、この十字架の死の意義について論ずる事はしない。キリスト教における神学では、避けて通る事のできない大論点ではあるが、ここでは、深入りする事はこの小論の目的とする所ではない。

イザヤ書において、冒頭に引用した箇所はあまりにも有名であり、ヘンデルも、かの有名なオラトリオ「メサイヤ」において序曲の後、まさにこの第二イザヤ書から始めている事は、まさに当を得た解釈であろう。しかし、ここでは、あえて着目したいのは、次の箇所である。

彼は不法を働かず

その口に偽りもなかったのに

その墓は神に逆らう者と共にされ

富める者と共に葬られた。

イザヤ書53・9

病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は臨まれ

彼は自ら償いの献げ物とした。

彼は、子孫が未永く続くのを見る。

主の望まれることは

彼の手によって成し遂げられる。

イザヤ書53・10

「その墓は神に逆らう者と共にされ」、「富める者と共に葬られた」と、ある。この二つの文は、何とパラドクスに満ちたものではないか。「自ら償いの献げ物」（十字架）とし、「主の望まれること」を成就した後、「神に逆らう者と共に」葬られた事が、まず一つ。そして不可解な点は、次の「富める者と共に葬られた」という記述である。この句に関しては、全く凡人の理解を超える預言である。新約聖書には、この具体的な詳細な記述は見ることができない。しかし、もし仮に埋葬された所が、「富める者」と共にあったとするならば、これをどのよう

に解釈すれば良いのであろう。

旧約聖書のヒマラヤとしてのイザヤ書が、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ5・44）に代表される山上の垂訓に収斂しているとすれば、「貧しき者は幸いなり」と全く反対の「富める者」と共に葬られたとするならば、これは何と皮肉に満ちた逆説であろうか。

一方、日本最古の現存する書物としての『古事記』を紐解いてみると、

我之女二並立奉由者、使石長比売者、天神御子之命、雖雪零風吹、恒如石而、常堅不動座、亦、使木花之佐久夜比売者、如木花之々坐宇氣比（中略）天皇命等之御命、不長也。『古事記』上巻より

天孫降臨の後、国神との結婚の場面であるが、大山津見神の女（むすめ）二人の内、姉の石長比売は、恒久の命、そして妹の木花之佐久夜比売は、繁栄の象徴であったが、姉の方が醜かったので返してしまった箇所である。非常に興味深い点は、「天皇命等之御命、不長也」と結ばれている事である。父である大山津見神は、自分の娘が返されたことを大変恥じて、二人の娘の特性を説明しているのだが、『古事記』の記録者は、結論として天皇の寿命が今日まで長くないのであると判じている。確かに、アブラハム百七十五歳、イサク百八十歳、ヤコブ百四十七歳、旧約聖書の世界と比較してみても、初代天皇と記されている神倭伊波礼毘古天皇（神武天皇）百三十七歳、綏靖天皇四十五歳、安寧天皇四十九歳、懿徳天皇四十五歳と短い。ここで、重要な事は、単に寿命の長さの長短ではない。むしろ、そこに起因する精神的構造の差異である。

村松剛の『死の日本文学史』によると、例えば夏目漱石の『こゝろ』の主人公の自殺、あるいは『平家物語』の平敦盛の最期を海外で説明する事は大変難しいようである。その背景として、村松氏が説明しているようにキリスト教世界、特にカトリック圏において自殺が近年まで禁止されていた事は、欧米人の死の精神的構造に多大な影響を与えた事は容易に理解出来る。ただ、聖書に自殺がないとは言えず、その例は前の小論で示した⁶⁷。それにしても、特に明治、大正、昭和における文豪の余りにも多すぎる自殺はどのように解釈できるのであるうか。個々の例により、それぞれの「理由」が考えられ、また考察をすべきであるが、近年における江藤淳氏の自殺に際して、湘南中学同窓の石原慎太郎氏は「美しいじゃないですか」とテレビのインタビューに答えていた。日本文化、文学自体において時代的に死の概念は異なり、変化しているので短絡的には括る事は不可能であるが、『古事記』以降、「ものあはれ」の文学の代表としての『源氏物語』、軍記物語としての『平家物語』に顕著に現れ始めた無常観。必ずしも、仏教的な起源、色彩を有して今日の日本文学を形成したとは言いが、やはり共通して感知しうるのが、「はかなさ」である。江藤淳が西欧と出会って、エリクソンの「同一性の危機」を経験し、一旦回復したかに見えても、最終的には多くの「先人」の跡を辿ってしまった。江藤氏は、アメリカ在留時代にすでに「二つの文化の異質

性のために、米国の社会で何の機能も果たさないのであるから、固執しようとするかぎり私はこの社会で死んでいる」(江藤淳『アメリカと私』)と述懐している。

玉の緒よ絶えなば絶えね　ながらへば　しのぶことの　よわりもぞする

(式子内親王) 『新古今和歌集 卷十一より』

藤原定家の『定家十体』において「有心様」の一つに数えられ、また百人一首にも撰集されている秀歌であり、恋歌の中に入れられて入るが、日本人の死生観を最も表した和歌といえるのではないか。日本の伝統的宗教(古神道)の伝統を感じさせる和歌である。魂と肉体を結ぶ物として「玉の緒」の存在がある。『万葉集』に見られる柿本人麻呂の死への傾斜。ギリシア哲学の霊肉二元論ともつながる所ではあるが、古代の人々の素朴な心情というよりは、シャーマンの存在の巫女が、あるいはこの「玉の緒」という実体を、明確に把握していたと著者は考える。

生きの緒に思へば苦し　玉の緒の　絶えて乱れな　知らば　知るとも

(『万葉集』卷十一、2788)

このような伝統的な日本的な死生観に、無常観という要素が、これは仏教伝来と共に流入された。仏教の本質と無常観が根源的な所で繋がっているのか否かは、今後更に研究を深めていきたい所ではあるが、平安末期からは確かに、この無常観への傾斜、あるいは憧憬が、貴族階級、そしてその後、台頭して来る武士階級の中に芽生え、育まれて行った事は間違いない所であろう。そして、この凝縮した和歌として、かの三夕の歌の一つ藤原定家の「見渡せば　花も紅葉も　無かりけり　浦の　苦屋の　秋の夕暮れ」に収斂して行く。この世の美の極地としての「花」も「紅葉」という二つの象徴も無い世界が、中世の美的感覚へと移行して行くのである。現代のバブル以降の日本が、この感性を受け継いでいるとは思えないが、少なくとも深層心理において根強く、この中世以降の観念が擦り込まれていく事は、日本文化を語る上では頭に入れておく必要があるのではないか。宮沢賢治『春と修羅』の序、

「わたくしという現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景はみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにとりつづける
因果交流電燈の

ひとつの青い照明です」

江藤淳の述べる「二つの文化の異質性」の狭間にあつて、異文化は融合し止揚してゆく。宮沢賢治の中にも、開国以降の、欧米という「異質」な文化との遭遇により、強烈にその衝突、摩擦を感じできる所であるが、これは中世における仏教と神道のシンクレティズム（習合）とは、また異なる、緊張感を持っている。東洋と西洋との出会いは、必ずしも幸福のみをもたらさなかつた。多くの近代の文豪の「死」は、その背景に少なからず、キリスト教との激しい出会いがあつた。そして、多くは「信仰」を見出すより、「死」を選んだと言つてしまうのは即断にすぎるであらうか。切腹という「文化」が、日本の士族階級に現出していったのは、唯一とは言わないが、やはり世界的に見ても希有な現象である。日本的伝統と仏教的思想、「恥」と「無常」との遭遇。加えて、近代はキリスト教という、思想的には大変複雑で、時には宗教改革という大変動を経験して来た宗教の日本移入は、日本という土壌において新たな視点を提供しつつある。明治以降は主としてプロテスタントが強く影響を与え、内村鑑三に代表される無教会運動という世界的にも特異な「表現」も産み出された。今後、「死」という共通の土

俵においてキリスト教が、日本社会にどのようなインパクトを与えるかは注目すべき所であらう。

冒頭に挙げた預言書イザヤの強烈なまでの死の光彩ゆえに、キリスト教における死というものが単に悲しみに満ちた「場」以上の空間を現出できるのではないか。柴田千頭男先生が、模擬葬儀の最後で、拍手を持って「死者」を送り出すというのは、まさにキリスト教側から日本社会への新しい文化チャレンジ、一つの視点の提供の大胆な試みと言う事ができるであらう。

* 1 「僕の歌」(42・14、49・16、50・4、9、52・13、53・12)の終曲として名高い。正確には53章の序曲は前章13節から始まっている。

* 2 中沢治樹『苦難の僕―イザヤ書53章の研究』新教出版序言より

* 3 大別して、現実のイスラエル一般、少数の自覚的あるいは理想的イスラエル、ある特定の個人の諸説がある。

また新約聖書における使徒言行録8・27-35における

* 4 北森嘉蔵『神の痛みの神学』講談社学術文庫p.111。

* 5 使徒言行録8:27-35のエチオピアの宦官とフィリポとの会話は非常に注目に値する。「どうか教えてください。」

預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人ですか」という宦官の言は、当時すでにイザヤ書が愛読されていたにもかかわらず、「手引きしてくれる人がなければ、どうしてわかりましょう」という告白に見られるように、いろいろな解釈、注解が成り立ちうる事を示している。

* 6 ニューヨーク・ユニオン神学校名誉教授であり、現在ミネソタ州セントポールルーテル神学校で教鞭を取られている「ウォーターバッチャロー神学」で著名な小山晃佑氏は、二〇〇六年八月の同信会夏期聖書講習会において、大胆に講演をされて、イザヤ書66章はマタイの福音書に収斂すると述べられておられる。

* 7 Toshiyumi Uemura, *Suicide in three perspectives: Biblical study,*

Bushido, and Koran, 日本葬送文化学会会誌第6号, 平成一五年一〇月。

日本の文化と宗教心

藤井 高

昨今のメディアは新しい葬送の形式をよく報道しています
が、果たして葬儀と言うものは、新しい形を模索するものな
のでしょうか？

確かに従来の白木の祭壇から花祭壇や音楽葬・故人の趣味を
表現した自由な葬送になってきました。

日本の文化でもある宗教心が希薄になりつつある現在、儀礼
というものが形骸化しつつあるのではないのでしょうか？

このことがご葬儀にも顕著に現れているように思います。

なにか葬送の儀礼的なことが薄れセレモニーといわれるみて
くれないものが前面に出てきているように思います。

実際、葬儀の85%は仏式で執り行われているのが現状では
ないのでしょうか。

仏式で葬儀が行われる以上は仏教の宗教儀礼的なことを送る
側の（御葬家）方に意識を持っていただくことが今、必要では
ないのではないのでしょうか。

宗教儀礼的なことがおろそかになってしまおうとお葬式という
セレモニーには満足しても後の法要などの仏事儀礼が希薄にな

り宗教離れに拍車がかかってしまうのではないのでしょうか。

本来は宗教者が高い位置からの説法ではなくご葬儀の時など
はいい機会なので今ここでこういう内容のお経を挙げ、次はこ
ういうことを唱えていますという前説が宗教を身近にさせてく
れるのではないのでしょうか？

わけのわからない外国語？では仏教というものにたいして敬
遠してしまうのではないのでしょうか。

一般の人がことばが判らないのは宗教心がないからなので
しょうか？

もっと仏教について勉強すれば判るようになる不勉強だから
理解できないのだ・・・

努力しなさいでは本末転倒になってしまっているのではないしょ
うか。

人が亡くなり火葬された後の遺骨を納骨するまでの49日の
中陰期間が宗教に対して素直にまた前向きな姿勢になることが
出来る期間ではないのでしょうか。

実際、葬儀社によつては納骨まで家で何をしたらいいのかと
の葬家の質問に特に何もすることはないので、ゆっくり葬儀の
疲れを取ってくださいと答えている事も聞きました。

忌明けまでに家庭で追善供養することによつて心が落ち着
き、また宗教儀礼的なことを行うことによつて、文化の継承と
定着に繋がるのではないのでしょうか。

S 治叔父さんに捧ぐ

杉浦 昌則

南の島で貴方は戦死した
昭和十九年 二十二歳の短い命でした
貴方が亡くなりやがて終戦をむかえ
貴方が散っていったその二年の後に
私は生まれた 貴方のいないその家に
田圃に新しい苗が育つ梅雨空の下
祖母が仏壇を恋人に生きていた
それから六十年がたち私と妻は
貴方の位牌と墓をお守りしています

貴方は比島のジャングルを工兵として行軍した
きつと水も食料も満足に持たないまま
暑さと湿気で気の遠くなる中を
敵機の襲撃を避けながら
見上ぐれば莫迦々々しいほどの青空と白い雲
身軽な蝶や鳥たちは快適に生きている
恵みの大自然の中を重たい荷物と火薬を抱えた
兵士達だけが拒絶され 次々と命を落としていく

二十二歳の貴方ははるか異国の空の下
どんな想いで最期を向かえたのでしょうか
喜んでお国のために命を捧げましたか
理不尽な運命を齒噛みして呪いましたか
見晴かす先に紺碧の海が横たわり
故郷はあまりにも遠く遙かだ

生まれ育った家の屋根や柱や壁の
一つひとつの形が蘇り家族が夢に立ち
病んで死を覚悟した その時の一人ぼっちの貴方が憐れ
生まれた世代が少し違ったら
私が貴方の立場だったかもしれない
五男坊の戸籍がきつと貴方のように
最も危険な戦地に私もやられたに違いない
私はいまこうして比島を訪れたのですが
貴方が逝った場所さえ分からない
貴方の家の者がこうして
初めて傍に来れたというのに
花束の一つも捧げられない
貴方を想い涙しても
貴方の苦しみ 哀しみ 絶望の
千分の一も近づけません

でも何も出来なくても傍に来れました
そして祈りました

それに貴方は応えてくれた

比島から帰国する飛行機の中その時刻
貴方の兄である私の父の命は召された
病床での辛い呼吸から開放され
満州に召集されて苦勞した父は其の時
全てを解き放たれ自由を駆け上った

平成十八年五月

第5回 モンゴル葬送文化視察 報告

モンゴル仏教大学教授・モンゴル・ラマ教総本山ガンダン寺主席僧侶
ビヤンバジャグ師との対談から

二村 祐輔

毎年モンゴルへの葬送文化視察として企画実施しているが、今年も参加者6名にて実施した。今年にはモンゴル建国800年記念の年でもあり、特別にビザ無し入国が可能であり、また夏季の期間さまざまな記念行事が開催されていることで、例年になく日本からの観光客も見込まれていた。

概要・行程

そのような経緯から、往復の航空便は通常の成田出発のモンゴル航空（MAT）ではなく、日本航空の行程はチャーター便が羽田発着ということで、その便を利用し8月3日～8日まで現地を訪れた。

8月3日(木)

22:00 羽田空港国際線ターミナルビル集合

8月4日(金)

00:00 羽田発

04:50 ウランバートル国際空港到着。国内線乗換えが遅れたので、まだ早朝の暗い中、チンギス村にて休憩・仮眠。薪にてストーブを焚く。

09:30 チンギス村のツーリスト・ゲルにて朝食。

11:00 空港に戻り、国内線に乗り、南ゴビへ出発。

13:00 南ゴビ プラグタイ空港へ到着。滑走路舗装なし。土煙をあげて大草原に着陸。

15:30 ツーリスト・ゲルでの昼食後、2時間かけてダランザドガド（南ゴビ県の県都）へ。行政機関訪問。近隣のラマ寺院訪問。現地の住まい（ゲル）を訪問。郊外の墓地視察。

8月5日(土)

早朝 禿鷹の谷へ出発・自然史博物館見学・アルタイ山脈の西の果ての山中（谷）を散策。

13:00 途中に「大分モンゴル友好の碑」があり、初代会長の遺骨が納められた日本人の墓があった。

同所、丘の向こうは現地モンゴル人の墓地があり視察。

14:30 キャンプに戻って昼食後、

15:30 モルツォク砂丘へ出発。

砂丘近くのゲルを訪問。また大草原の遊牧民の飲料水確保が疑問であったので、井戸まで案内してもらった。（但し、家畜用の飲料水井戸で、飲み水用の井戸の場所は秘密ということであった。）砂丘から草原一体は、ネギの原種が自生している。一見、野蒜のような形状であるが、ネギの味がする。

8月6日(日)

06:30 起床・朝食後、プラグタイ空港から首都ウランバートルへ。

- スフバートル広場など、市内見学の後、
- 11:00 モンゴル仏教大学・モンゴル・ラマ教総本山ガンダン寺
 モンゴル仏教大学教授・モンゴル・ラマ教総本山ガンダン寺主席僧侶ピヤンバジャグ師と
 対談。
 昼食後、建国800年記念祭を見学「騎馬軍団による模擬戦争」・・・写真参照
 フード・ザハ（食品市場）・デパートなど

8月7日(月)

- 09:30 日本人墓地跡へ。ザナバザル仏教美術館にてB.シャラブ「モンゴルの一日」風葬と鳥葬の
 様子を記録・・・写真参照
- 11:30 プヤン葬儀社訪問。歓迎レセプションの後、火葬場見学。ウランバートル市住民の墓地視
 察。・・・写真参照
 夕方、民族歌舞団観賞その後、ザイサントルゴイ（戦勝記念の丘）で日没。21：30。
- 22:30 ウランバートル国際空港へ

8月8日(火)

- 01:00 ウランバートル発
 05:30 羽田着 解散

参加者

日蓮宗春慶寺住職齊藤堯圓 師（東京都）・株金華堂代表取締役 金刺哲弥氏（静岡県）・株吉田
 葬祭 取締役 伊地知美千代氏（鹿児島県）・高柳佐和子氏（東京都）・東京観光専門学校フュー
 ネラル・ビジネス学科1年生 千葉結衣子さん・日本葬祭アカデミー教務研究室 二村祐輔

計6名

報告

モンゴルラマ教の総本山ガンダン・ガンダン・テクチェンリン僧院 (Gandantegchenling Monastery)
 通称ガンダン寺は、1838年、第五代活仏によって建立されたチベット仏教（ラマ教）寺院で、極左政権
 期には寺院としての機能は失われたが、1940年代には回復。現在10の僧院・寺院からなる学問寺であ
 り、約900人の修行僧がいる。

境内の観音堂 (Migjed Janraisig) には高さ26.5メートルの開眼観音像が祀られている。

この像は1996年に再建されたもので、初代の像は1938年にソ連の共産政権により破壊され、持ち去られ
 たという。現在の像はエルデネト鉱山 (Erdenet Mine) で採掘された銅製で、金メッキが施され、モンゴ
 ル独立の象徴となっている。また1970年にはモンゴル仏教大学 (Buddhist University of Mongolia : ザナ
 バザル仏教大学) が併設された。さらに最近の改革以後、民族文化の再建、文化財の保護・修復運動の
 中心的存在となっている。

モンゴル仏教大学教授でガンダン寺主席僧侶でもあるピヤンバジャグ師の対談の中で、やはり1990年
 までの70年間、ソ連の影響下にあった時代の軋轢が大きく影響を及ぼしているという。その時代にはモ
 ンゴル国内で約800の寺院が壊され、7000人近くの僧侶が殺されたり監獄に入れられたりしていたとい
 うことであった。今まさにその復興をかけて、僧侶の養成も含めてこのモンゴル仏教大学がその中心的
 な役割を担っている。他には、幼年期から僧侶になるための小学校や中学校もあり、僧侶数の拡充が急
 務となっているとのこと。ただ、現在に至って、首都ウランバートルを中心として、市内にはキリスト

教会が300ほどあり、その多くが西欧諸国からの布教が基盤にはあるが、特にアジアから韓国人によるキリスト教の布教活動が極めて強く、信者同士の婚姻なども積極的に勧めることから、地方へ進出も勢いを増しているとのこと。この背景には、韓国資本の経済的事由があるという。これらの他宗教の進出に対しては、もちろん協調的なかわりを持つべきと考えているが、伝統的なモンゴル・ラマ教が復活した矢先のことでもあり、これからの対応を踏まえていろいろと問題が出てくるのではないかという見通しを述べられた。

思想的・経済的には自由化されたモンゴルではあるが、すでに首都への多大な人口流入、全人口250万人のうち、100万人近く（公称95万人2005年現在だが、戸籍の不備もあり実態はそれ以上である）が集中することによるスラム化現象や、多大な格差社会の広がりをすでに兆候として見る事が出来る。その中で今後、ラマ教がどのように人間福祉にかかわっていくべきかをこのガンダン寺を中心にして着実な行動を伴っていきたい。ラマ教が日常生活に改めて宗教として復活してからまだ日は浅いので、伝統的な習俗観はあるものの、その教義や宗教性に対するその知識も浅いのが現状で、これは大学、寺院ともに、その布教、教育浸透を今後の急務としている。

しかし、最近特に若い世代や貧困層にキリスト教を支持する人が増えつつある。その理由に、キリスト教が社会福祉に力を入れていることが挙げられる。例えば、無料で英語を教えるなどである。この点で、仏教側は遅れをとっていると思う。

今後、この現状を良くしていくために、是非、日本の仏教者との連携や交流を持ちたい、ということであった。

以上報告

現在、この大学では、11年制の学校（小学校から高校まで一環した仏教者養成で現在30人ほどの生徒が学ぶ）と大学（現在の生徒数は200人ほど）がある。まだまだ仏僧の数が少ないので、当然ながら増員を図っているが、寮などの施設が少ないことなどがそれを押し留めているように感じられる。

自由化後、葬送儀礼はラマ教による仏教式がほとんどである。また2004年にモンゴル最初の火葬場が運営を開始したことにより、かつての風葬から土葬の強制、そして今、火葬へとその葬法も大きな変化を示している。しかし、キリスト教の普及によりその点でも大きく変化してくることが予想される。いずれにしても、土葬から火葬へと葬法変化が過渡期を迎えている中、特に首都ウランバートル郊外においては土葬墓地の浸潤が過度な拡充を招き、広大な丘陵や草原は無計画な墓地敷設で都市問題化している。最近になってやっと、全体の敷地区画を設定したくらいで、火葬率が上昇するまでの間、まだまだ墓地は拡大し続けていくであろう。

ガンダン寺においても、現在、僧侶などが葬儀への対応として火葬を勧めている。その火葬場の運営を第1号として行っているのが、国営から民営に経営移管されたブヤン葬儀社であり、今回表敬訪問をした際、やはり深刻にこの墓地問題を投げかけていた。

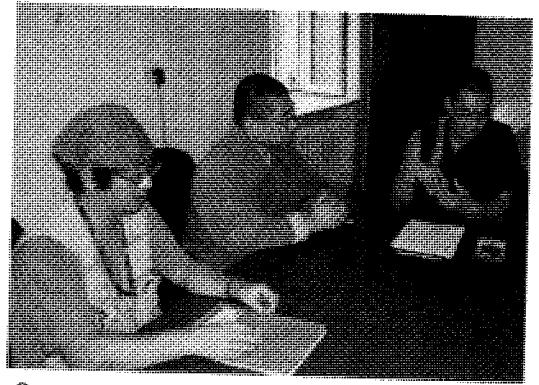
同社では、現状の土葬墓（個人墓）を火葬後、焼骨による家族墓などの集合墓に置き換えて、その区画をコンパクトなものにするような対応がなされ始めていた。これによって墓地面積の減少を考えていることと、火葬場敷地内における納骨堂建立を毎年行い、その集合理蔵施設を普及させていくことで対応していこうとしている。

ブヤン葬儀社では本年4月、副社長ゲレルトヤさんが訪日された際、都内各所の葬送施設や埋葬施設（納骨堂など）、戸田火葬場の火葬技術など見学しご案内したこともあり、私たち一行の訪問を歓迎しレセプションを開催された。

その席上、あらためてこれからも日本の葬祭企業の方々と友好と情報交換をお願いしたいというメッセージを託された。同時に自社社員2名を1年間、日本の葬祭サービスや斎場施設管理などを学ばせるために派遣したい旨、その受け入れができる日本の葬祭企業を求めているとのことであった。



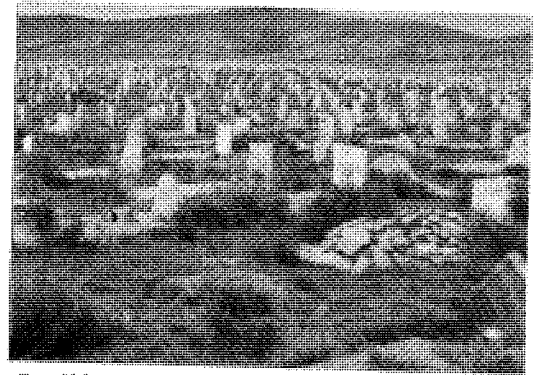
① モンゴル仏教大学正面玄関



② 対談中



③ 風葬が描かれている絵画の一部



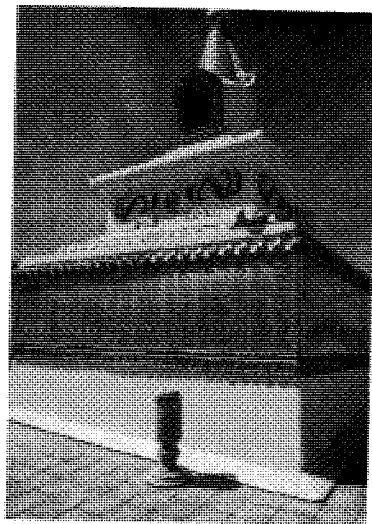
④ 首都ウランバートル郊外は一面、壮大な墓地



⑤ プヤン火葬場



⑦ 建国800年祭。モンゴル騎馬兵による壮大な戦いを再現



⑥ 併設の納骨堂

活動報告

平成17年

11月懇談会

日時 11月30日(水)

場所 東京文化会館 中会議室②

テーマ 『葬儀社から葬儀者へ』

講師 (株)杉田フューネス 代表取締役 杉田伊紗武氏

12月忘年懇親会

日時 12月26日(月)

場所 台東区上野『月の宴』

平成18年

1月定例会

日時 1月28日(土)

場所 東京文化会館 中会議室①

テーマ 『医療と看取り、最前線からの問題点と報告』

講師 医療法人協仁会小松病院 名誉院長 谷 荘吉氏

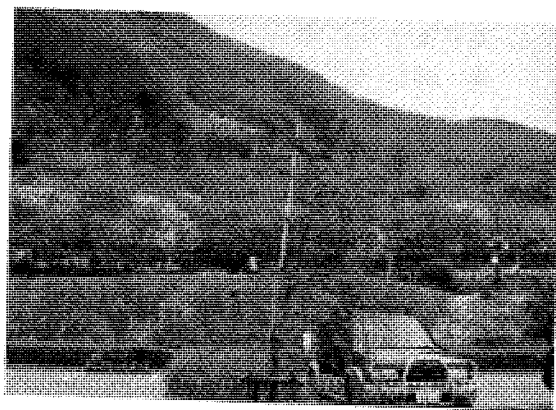
2月野外研修

日時 2月27～28日

場所 神奈川県 湯河原 『白雲荘』

テーマ 『湯河原の老舗葬儀社 茂登山商店社長に聞く、葬祭業の在り方』
——茂登山氏を囲んで会員同志の親睦と語り——





3月懇談会

日時 3月29日(水)
場所 東京文化会館 中会議室②
テーマ 大学生卒論発表 『現代の「死」について』
——なぜ今、「直葬」なのか。その背後に迫る——
発表者 和光大学 4年 明滝 結さん

4月定例総会

日時 4月28日(金)
場所 東京文化会館 大会議室
・定例総会 18:30~19:15まで
・定例会 19:30~20:30まで
テーマ 『インド報告 火葬と宗教について』
報告者 ルーテル学院大学 助教授 上村敏文氏

さる3月16日~23日、学会有志数名の参加者を含むインド旅行が実施されました。

上村先生がその時の模様をビデオに撮られてこられましたので、その上映や解説をお願いいたしました。また同行した会員もそれぞれの立場で感想報告をしました。雄大なインドの歴史的な建築物から、アグラ市内の火葬場や有名なヒンズー教の整地ベナレスでの火葬なども紹介されました。

日本葬送文化学会 第5回「定例総会」報告

平成18年4月28日午後6時30分より東京文化会館大会議室にて開催

総会員数(平成18年4月20日現在) 法人会員31社・正会員(個人)56名 計87名
出席会員(議決権有効者数)・・・29名+委任状・・・25名分 計54名
総会開催定数44名以上 議決構成は『出席会員』の2/3以上(会則7条2項)で36名以上

定例総会議事

議長選出・・・ルーテル学院大学 名誉教授 柴田千頭男先生
第1議案 平成17年度活動報告に関する事項・・・事務局報告
第2議案 同 収支決算に関する事項・・・会計・監査報告・・・承認
第3議案 平成18年度活動予定に関する事項・・・事務局説明・・・常任理事会一任承認

第4議案 同 収支予算に関する事項・・・会計説明・・・承認

第5議案 役員改選等に関する事項・・・・・・・・・・事務局説明

主旨：学会活動の大きな主軸である研究書『火葬後拾骨の東西』に関して、予定より少し遅れて、現在進行中です。本年度の完成を目指していることから、その中心的主導を担っていただいている浅香勝輔氏（平成16～17年度 現会長）を『特例』として、会則10条1項にある会長任期（2年間のみ就任・留任なし）規定を時限的に運用していただき、平成18年度のみ1年延長を総会決議でお願いしたい。・・・・・・・・承認

その他議案 平成18年度の理事（学術）・常任理事（運営）の役員人事・改選は常任理事会に一任。・・・・・・・・承認

以上 午後7時15分閉会・・・浅香~~長~~会長・所信挨拶・・・事務局報告・質疑応答

平成18年5月11日 午後6時30分 常任理事会 東京文化会館応接室①

出席常任理事 浅香会長・野崎・杉山・大杉・原・岩崎・二村

内容：総会における常任理事一任事項の検討会議・・・活動予定・役員改選人事（下記）

内示：平成18年度 役員一覧（敬称略・順不同）

会 長・・・・・・・・浅香 勝輔

学術関係 理事・・・・・・・・柴田千頭男

理事・・・・・・・・田中 久文

理事・・・・・・・・谷 莊吉

理事・・・・・・・・上村 敏文

理事・・・・・・・・山田 慎也

新理事予定・・・・・・・・井上 彰三（事務局打診中）

運営執行 常任理事・・・・・・・・荒木 由光・・・監査

常任理事・・・・・・・・岩崎 孝一・・・会報

常任理事・・・・・・・・野崎二三子・・・監査

常任理事・・・・・・・・阿島 武志・・・書記

常任理事・・・・・・・・大杉 実生・・・会計

常任理事・・・・・・・・勝山 宏則・・・WEB 浅野・・・書記

常任理事・・・・・・・・杉山 昌司

常任理事・・・・・・・・杉浦 昌則・・・野外研修・懇親会担当

常任理事・・・・・・・・原 敏之・・・WEB

常任理事・・・・・・・・三橋 初枝・・・会報

常任理事・・・・・・・・若月 洋介・・・書記

常任理事・・・・・・・・菅原 裕典・・・東日本担当

常任理事・・・・・・・・下村 侃・・・西日本担当

常任理事・・・・・・・・二村 祐輔・・・事務局

新旧交代 新任常任理事予定・・・和田 裕助・・・WEB

新任常任理事予定・・・増田 藍・・・会計

退任常任理事・・・・・・・・和田 恵助

以上

5月懇談会

日 時 5月29日（月）

場 所 東京文化会館 中会議室①
テーマ 会員による懇談『小規模葬』

6月定例会

日 時 6月24日(月)

場 所 東京文化会館 中会議室①

講 師 (株)テクノファースト 代表取締役 新井重克氏

*本定例会での私の考え方を、率直要約致します

- ・私自身が門外から「霊柩車」製造販売にかかわりました当時、購入者であるお客様(運送事業者・葬儀社)から、霊柩車について質問、意見を沢山頂きましたが、その大部分について「承る」状態が常の状況でありました。
- ・私の「生業」からして「霊柩車とは」のテーマ認識を痛切に覚え、文献あさり致しましたが、結果たどり着いたのが、研究対象化された経過が無い、当該の文献資料が無いという、当時での認識でした。
- ・では、法体系上どうであるのかと申しますと、行政所轄が国土交通省、当時の運輸省であります。輸送客体である御遺体を法理論上「物=貨物」として定義取扱い、同時に特殊用途車としての区分では「霊柩車」霊柩運送との用語を用いて、「あたかも霊を運ぶ車」との字句表現を用い、「物」から逸脱を同居させています。又、事業用貨物自動車の車検有効期間は1年間と定められていますが、「霊柩車を事業用貨物自動車」と定義しながら、その車検有効期間は2年と定めています。誠に整然としない取扱いを受けている車輛でもあります。
- ・「霊柩自動車」の現代的な位置での存在の仕方が、研究の対象となりえなかったとしても、この車輛が固有に持つ社会的有用性を評価する時、もう少し学者、研究者からの考察があっても良いのではないかと考えた時期がございました。
- ・その後、井上章一氏による「霊柩車誕生=朝日新聞社THE」 「霊柩車=祥伝社」刊行によりかなり「霊柩車」が「かたりべ引用羅列的」ではありますが、解明されたかなと、井上章一氏の労を高く評価しているところであります。
- ・自動車は形態用途のいかんを問わず、輸送移動の手段であります。したがって、その機能面から「車を造る思考」からすると衛生的「保冷車」が「輸送客体である御遺体を棄損すること恐れもなく的確に輸送を完了できる車」と理論付けることが仮説的には可能であります。しかしながら、これはまったくの仮説でありまして、創業累計約800輛の私の製造販売体験の中にかかる造りの「保冷車」は1輛も無かったということでもあります。
- ・死者に接する時の人間の感性には悲痛きわまりない感情があり、それはしばしば宗教的祭儀が伴うものであります。葬送の場となる火葬場への野辺送りは、死者である御遺体に対する最終的決別に至る道であり、葬儀儀礼自動車は、まさにその道を歩む現代の柩車であると考えます。本日は誠に稚拙なお話を致しましたが、本、葬送文化学会がテーマとして「霊柩車」を取り上げて頂けたことに心から感謝致しますとともに、更に深めた考察が会の研究者により編まれていく事を期待したいと思えます。

7月懇談会

日 時 7月21日(金)

場 所 東京文化会館 小会議室①

テーマ 『お墓から見た地域性』 担当 阿島氏

日本の国土はそれほど広くはないが、南北の距離間を入れると2000キロを超える。北は北海道、南は九州、沖縄、更に離島では小笠原（沖の鳥島は除く）まで広がる。そんな中、葬儀だけではなくお墓にも地域性がある事を改めて把握することにし、今回集まった会員で座談会を開催し意見を述べてもらった。

「埋め墓」と「参り墓」の存在

お墓の問題は葬儀の問題に密着していることを改めて知ることになった。葬儀が終わってからお骨の問題を抱える家庭は少なくないはず。特に首都圏というより土地に限りがある都内ならなお更のことである。そこで最近発展してきたのが墓地とお参りを分ける傾向がある。これは昨日今日始まったことではなく、土葬が習慣だった頃は特にその傾向があった。何故ならば、「死体は汚らわしい」という発想に基づいているそうだ。そこである地域では「広場にお骨のみ埋めて（土葬の当時は死体そのものだったのかも知れないが）、お参りはきれいな場所で」の習慣があった。

「埋め墓」と「参り墓」が存在していた。そこで地方へ行くと一家（先祖代々）の埋め墓があり、その直系はその埋め墓に埋葬されてお参りは別のところと言う習慣があったという。だが今の埋葬法だとそれは出来ない。先ずは墓地でないと埋めてはならないと言う制限があり、誰もそこに自分用の「埋め墓」があるわけでもない。地域によっては「埋め墓」と「参り墓」は隣り合わせのところもあったようだ（例：河口湖近辺の集落）。日本人の文化としてお参りできる場所を探していることは確かである。

宗教論は別として考え方としては靖国神社と同じような仕組みではなからうか。

「都会の納骨堂」

バブルの時は土地が安い地方に墓地の買いに動いた。自分達は首都圏に住んでいるが、お墓だけは遠い田舎。そしてお参り時はミニバケーションの気分で縁もゆかりもない田舎へ旅をし、心の癒しを求めた人たちが多々いたはず。だが時が経つと近場になくことで不自由さを逆に感じはじめ、家族全員の宿泊費を含む旅費の計算も考慮し始めたら意外とバカにならないことも発覚。更にマメな人だと盆暮れにお彼岸や命日など年に4、5回はお参りするようになるのとてつもない金額に上る。すると首都圏に住む人たちは公営墓地は買えないが、気軽に訪れられる納骨堂などを近くに求めるようになったのでは。

「田舎の納骨堂」

では田舎での納骨堂は流行るのか。まだ結論を出すのは早いですが、田舎の土地の利用面積や安さを考えてみよう。ある業者が北海道に納骨堂をつくったとする。北海道へ一度でも訪れた人なら広さと土地の余り具合を感じたかと思う。北海道だけではなく、人口がそれほど密集していない場所ならどこでも一緒かと思う。人々は土地が安いところで狭いお骨を預けるロッカーを買うかと言う疑問が浮上している。だがこれは偏見に過ぎない。納骨堂の良さは自分が管理しなくても良い。交通の便が良い街のド真ん中にでも設営出来ることは忘れてはならない。わざわざ田舎に買って飛行機で行き、レンタカーを借りる必要性がないとは言える。だが、今のところ一般的には田舎に住む人たちはわざわざ納骨堂を買う人はそういないかと考える。

「簡素化する葬送の儀」

簡素化する理由はいくつか考えられるが根本的に葬送の文化を含む日本の文化を教えることが出来ない教育者、それに興味を示さなくなった人々の両者に問題があるのかも知れない。お墓は人が辿りつく最後の場所である中、都内近郊、首都圏の通勤圏内の不動産としてもものすごく高価（今までは転売、再利用が出来なかったため）でありなかなか買えない事情があるのは事実である。葬儀費用からお墓の費用まで考えると今の生活に不自由することなく費用を工面するにはどこか大幅に削る必要がある。すると一貫して簡素化することは目に見えている。最後は墓、墓石費用そのものを削り葬送の

儀そのものを安く、簡素化することが常識のようになりつつある。

簡素化した葬儀になり、墓まで購入するようになると費用を工面することが難しい一般家庭だと納骨堂になるのでは。簡素化する一つの理由としては葬儀費用から最後のお墓の費用まで一体いくら掛かるのかが不透明であるのも事実である。葬儀費用も不透明であるのと、出たところ勝負の費用もあり（お返し物などの返礼品の数が弔問者の数によって変わる）、更に宗教者へのお礼がきちんと示されておらずお墓にいくら掛けられるかがわからないのも事実である。非日常生活な故、予算を組み立てる術もなければ情報もない。

結論として墓地事情は時代とともに変わり、その時代のニーズに合わせて進化しており見守るしかない中、我々も進化に対応する必要がある、文化を絶やさないように周囲を教育する必要があるのではないか。



8月懇談会

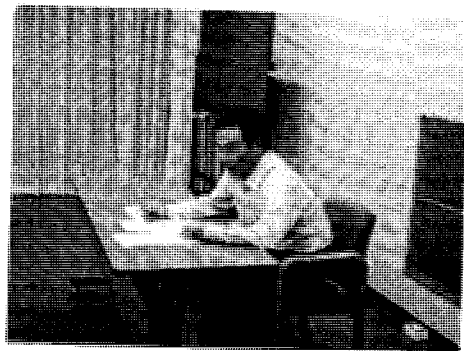
日時 8月10日(水)

場所 東京文化会館 小会議室②

テーマ 『最近の法規制と葬儀施行・道交法・個人情報保護法』 担当 若月氏

○葬儀法規 ○個人情報保護法 ○改正道路交通法 ○京都議定書

今年の4月から法律が変わり、葬儀を営むのに罰則が厳しくなり一部では業界いじめとまで言われ、国会まで動いた。そして葬儀の際、車でお参りに来た人たちの車両の問題、個人情報保護法の一人歩きにより会葬礼状や葬儀案内の看板の立て掛けにまで問題が及んでいる。そこで学会では各会員がどのような問題に直面し、どのように対処しているのかを懇談会にて意見交換した。



9月定例会

日時 9月21日(木)

場所 東京文化会館 中会議室①

講師 早稲田大学 人間科学部 教授 谷川章雄氏

江戸時代では初期のころから後半に掛けて様々な棺の形、火葬の習慣があり、時代と共に変化を遂げ一時期は火葬の習慣がなくなるまで変化した。今回の講師は早稲田大学人間科学学術院(人間科学部・人間科学研究科、人間総合研究センター)教授の谷川先生をお招きして、国内においての変化、江戸での状況を先生なりの仮説を含めて人々の死に対する対応のお話を伺った。谷川先生は単なる文献のみの報告ではなくご自身にての調査に基づいた結果をご教授下さいました。従って先生の推測や仮説は事実に基づいた見解であり非常に高い信頼が出来る情報です。



日本葬送文化学会誌 (第九号)

発行

日本葬送文化学会
会長 浅香 勝輔

事務局

〒321-0628
栃木県那須郡烏山町金井一八一二
(有) 一二三
電話 ○四八七―八二―二五三六
事務局長 阿島 武志

発行日

平成一八年 十二月二十日

編集

岩崎 孝一

印刷

スタジオ創造